

フランスの詩と歌の歴史—その2—

— フォーレの周辺の作曲家たち —

金原礼子

はじめに

十九世紀後半に成立したフランス歌曲は、前世紀からの親しまれていた旋律の美しいロマンス、オペラのアリア、ドイツリートの影響を受けた歌謡にはじまった。その中には、たとえば、グノーの「セレナーデ」、マスネの「エレジー」、フォーレの「夢の後に」などの名曲がある。

十六世紀のプレイヤド派の叙情詩以降、十七、十八世紀にフランスの叙情詩は低調であった。十九世紀になり、近隣諸国の文学の影響を受けて、ロマン派詩に始まり、高踏派詩、象徴派詩とさまざまな文学運動が興り、新しい叙情詩が復活すると、詩を歌う音楽である歌曲にも新しい道が開かれて行く。フォーレやドビュッシーはグレゴリオ聖歌の旋法を採り入れ、ドビュッシーやラヴェルは、近東、東アジアの音を取り入れて、フランス語の詩の響きを生かした歌曲を作曲した。

筆者は『ガブリエル・フォーレと詩人たち』（藤原書店）などで、フォーレがフランス歌曲の成立者であることを述べてきた。それをふまえてここでは、フォーレ以前の作曲家また、同時代の作曲家、後輩にあたる作曲家がどのような詩に作曲していたか、つまり、十九世紀から二十世紀にかけて79年の生涯を生きたフォーレの周辺の作曲家の作品を通して、フランス歌曲の歴史を探って行きたいと思う。

フォーレ以前の作曲家たち、すなわち、フランス歌曲の先駆者たちとして、ニードルメイエル、ベルリオーズ、グノー、フランク、ラロ、サン＝サーンス、ビゼーをあげる。

先駆者として新しい音楽を模索した作曲家たちは時代を反映し、多くオペラを遺しているが、オペラの台本作家やロマンスの歌詞を書く作詞家の詩による歌曲のほかに、新しい芸術の先端に行くロマン派の詩人の詩にも作曲するようになった。結果として、ロマンスやドイツ・リート旋律本位の歌曲の域を脱

する事ができなかったが、作曲家たちは歌曲の芸術性を高めることに腐心しながらも数々の名曲を遺した。

つぎに、同時代の作曲家として、多数のオペラを書き、美しい旋律の曲を書いたマスネ、旋律美を保ちながら、中世の『狐物語』やラ・フォンテーヌの『寓話集』以来の伝統ある動物の滑稽な姿、実は人間の本質を描くフランスの伝統的な物語の系譜を引き継ぐロスタンやジェラルの動物詩を音で描いたシャブリエ、フランキスト（フランクの弟子たち）として重厚な音楽を創った、デュパルク、ショソン、ダンディがいる。また、フォーレと平行してフランス歌曲に画期的な音を響かせたドビュッシーをあげよう。普仏戦争、パリコミューンを経験し、新しいフランスを作り上げる世代の音楽家たちであり、国民音楽協会と共に新しい音楽を模索した同志も含む作曲家たちである。

最後に、フォーレの後を引き継ぎ二十世紀の音楽を方向付けた、新しい歌曲の担い手となった作曲家たち、サティ、アーン、ラヴェルの歌曲をあげる。すなわち、貴族、ブルジョワジーのサロンで愛好されていた音楽にキャバレー、カフェ・コンセル、シャンソニエで人々を楽しませていた旋律を取り入れたサティ、時にはサブ・カルチャー次元の旋律を取り込みながら、飽くまでも洗練された音楽を作曲したアーン、一方、ヨーロッパ各国から、近東、インド洋上の島、マダガスカル为民謡まで取りあげたラヴェルである。ここに記すのは、これらの作曲家の歌曲と詩を調査したものであり、十九世紀から二十世紀初頭までの歌の歴史を考察する資料である。調べられる限り作曲年代を付すが、現在まで、調査未了、あるいは不可能な件については空白のままにする。

なお、ニーデルメイエルとベルリオーズについては、その1で述べたが、その後の研究で追加の部分もあるので、多少、重複するが、載せることをお許しいただきたい。

まず、フォーレの周辺の作曲家と比較対照するにあたり、フォーレの歌曲と詩についてのデータを掲げよう。

- * 人名の原綴は初出のみに記す。
- * 生歿年はわかる限り初出に入れるが、不詳の場合は()等省略。
- * ロマン派、高踏派等の埒外にあって活躍した詩人に関しては、前後にスペースをもうけて記す。

* 一般に馴染みの薄い詩人については簡単な略歴を記す。

* フォーレ以外の作曲家の作品については、原則として、歌曲のみを取り上げるが、重唱、合唱についても必要があるときには記す。ただし、ここでの歌

曲とは、一般的な意味の歌曲で、ピアノ伴奏による独唱曲のことである。

- * 各作品の末尾の()内の数字は制作年代。
- * 各歌曲には「 」、連作歌曲には『 』を付す。

◇フォーレ Gabriel Faure(1845-1924)

(1) ロマン派詩人

- ・ユゴー-Victor Hugo(1802-1885)：[1]「蝶と花」*Le Papillon et la fleur*(1861)
[2]「五月」*Mai*(1862?) [3]「ある僧院の廃墟にて」*Dans les ruines d'une abbaye* [4]「愛の夢」*Reve d'amour*(1862?) [5]「いなくなったひと」*L' Absent*(1871) [6]「あかつきが生まれ」*L'Aube naît*(1862? 紛失) [7]「ぼくがかくちづけをしたから」*Puisque j'ai mis ma lèvre*(1862 消失) [8]「オランピオの悲しみ」*Tristesse d'Olympio*(1865頃 未刊) [9]「あけぼの」*L' Aurore*(1870頃) [9]「この世では如何なる魂も」*Puisqu'ici-bas toute âme* (ソプラノ二重唱, 1863頃から73) [10]「魔神たち」*Les Djinns*(混声合唱, 1875?) .

(2) 後期ロマン派詩人

- ・ゴーチエ Théophile Gautier(1811-1872)：[1]「船乗りたち」*Les Matelots* (1870頃) [2]「ただひとり！」*Seule!*(1871) [3]「漁夫の歌」*Chanson du pêcheur*(1872?) [4]「悲しみ」*Tristesse*(1873頃) .

(3) 高踏派詩人たち

- ・ルコント・ド・リル Leconte de Lisle(1818-1894)：[1]「リディア」*Lydia* (1870頃) [2]「ネル」*Nell*(1878) [3]「イスファハーンの薔薇」*Les Roses d'Ispahan*(1884) [4]「薔薇」*La Rose*(1890) [5]「不滅の薫り」*Le Parfum impérissable*(1897) [6]「明るい空の下で」*Dans le ciel clair*(1902) .
- ・モニエ Marc Monnier(1829-1885)：[1]「舟歌」*Barcarolle*(1873) [2]「タランテラ」*Tarentelle*(ソプラノ二重唱, 1873頃) .
- ・シルヴェストル Armand Silvestre(1837-1901)：[1]「旅人」*Le Voyageur* (1878?) [2]「秋」*Automne*(1878) [3]「私たちの愛」*Notre Amour*(1879頃) [4]「秘めごと」*Le Secret*(1880-81) [5]「愛の歌」*Chanson d'amour* (1882) [6]「歌の妖精」*La Fée aux chansons*(1882) [7]「牧歌」*Madrigal* (四重唱あるいは合唱 1883) [8]「あけぼの」*Aurore*(1884) [9]「捨てられ

- た花」*Fleur jetée*(1884) [10]「夢の国」*Le Pays des rêves*(1884) [11]「いちばん楽しい道」*Le plus doux chemin*(1904) [12]「山鳩」*Le Ramier*(1904).
- ・シュリ・プリュドム Sully Prudhomme(1839-1907)：[1]「水のほとりで」*Au bord de l'eau*(1875) [2]「この世では」*Ici-bas*(1874?) [3]「ゆりかご」*Les Berceaux*(1879).
 - ・マンデス Catulle Mendès(1841-1909)：[1]「九月の森で」*Dans la forêt de septembre*(1902) [2]「波にたたよう花」*La Fleur qui va sur l'eau*(1902).
 - ・グランムージャン Charles Grandmougin(1850-1930)：『ある日の詩』*Poème d'un jour*(1878)全3曲内訳→(1)「出会い」*Rencontre* (2)「永遠に」*Toujours* (3)「別れ」*Adieu*.
 - ・アロクール Edmond Haraucourt(1856-1941)：[1]『シャイロック』*Shylock*(1889)全3曲内訳→(1)「唄」*Chanson* (2)「牧歌」*Madrigal* [3]「殉教」*La Passoion*(混声合唱, 1890 未刊).
- (4)・ボードレール Charles Baudelaire(1821-1867)：[1]「秋の歌」*Chant d'automne*(1870頃) [2]「賛歌」*Hymne*(1870?) [3]「身代金」*La Rançon*(1871?).
- (5)・ヴィリエ・ド・リラダン Villiers de L'Isle-Adam(1838-1889)：[1]「夜曲」*Nocturne*(1886) [2]「贈物」*Les Présents*(1887).
- (6) 象徴派詩人たち
- ・ヴェルレーヌ Paul Verlaine(1844-1896)：[1]「月の光」*Clair de lune*(1887) [2]「スプリーン」*Spleen*(1888) [3]『ヴェネチアの五つの歌曲』*Cinq Mélodies, dites de Venise*(1891)全5曲内訳→(1)「マンドリン」*Mandoline* (2)「ひそやかに」*En sourdine* (3)「グリーン」*Green* (4)「クリネーヌに」*A Clymène* (5)「やるせない夢心地」*C'est l'extase*. [4]『よき歌』*La Bonne Chanson*(1892-94)→(1)「後光に輝く聖女さま」*Une Sainte en son auréole* (2)「暁がひろがるので」*Puisque l'aube grandit* (3)「白い月、森に輝き」*La lune blanche luit dans le bois* (4)「僕は不実の道を歩いていた」*J'allais par des chemins perfides* (5)「本当に恐ろしいほど」*J'ai presque peur en vérité* (6)「おまえが消えて行くまえに」*Avant que tu ne t'en ailles* (7)「だから、夏のある晴れた日のことだろう」*Donc, ce sera par un clair*

jour d'été (8) 「ね、そうだろう？」 *N'est-ce pas?* (9) 「冬は終わった」 *L'hiver a cessé*. [5] 「牢獄」 *Prison* (1894).

- ・リシュパン Jean Richépin (1849) : [1] 「涙」 *Larmes* (1888) [2] 「墓場にて」 *Au cimetière* (1888).
- ・サマン Albert Samain (1858-1900) : [1] 「黄金の涙」 *Pleurs d'or* (メゾ・ソプラノとバリトン二重唱, 1896) [2] 「夕暮れ」 *Soir* (1894) [3] 「アルペジョ」 *Arpège* (1897) [4] 「道づれ」 *Accompagnement* (1902).
- ・ドミニック Jean Dominique(?) : 「無言の贈物」 *Le Don silencieux* (1906).
- ・レニエ Henri de Régnier (1864-1936) : 「唄」 *Chanson* (1906).
- ・ヴァン・レルベルグ Charles Van Lerberghe (1861-1907) : [1] 『エヴァの歌』 *La Chanson d'Ève* (1906-10) 全10曲内訳→(1) 「楽園」 *Paradis* (2) 「最初のことば」 *Prima verba* (3) 「燃える薔薇」 *Roses ardentes* (4) 「なんと神は輝いて」 *Comme Dieu rayonne* (5) 「白いあけぼの」 *L'Aube blanche* (6) 「活ける水」 *Eau vivante* (7) 「目覚めているのか、太陽のようなわたしの薫りよ」 *Veilles-tu ma senteur de soleil?* (8) 「白い薔薇の薫りの中に」 *Dans un parfum de roses blanches* (9) 「たそがれ」 *Crépuscule* (10) 「おお、死よ、星くずよ」 *O Mort, poussière d'étoiles*. [2] 『閉ざされた庭』 *Le Jardin clos* (1914) 全8曲内訳→(1) 「聴許」 *Exaucement* (2) 「あなたの目がわたしの目を見つめると」 *Quand tu plonges tes yeux dans mes yeux* (3) 「先ぶれ」 *La Messagère* (4) 「あなたの心に身を委ねましょう」 *Je me poserai sur ton cœur* (5) 「ニンフの洞窟にて」 *Dans la nymphée* (6) 「薄暗がりの中で」 *Dans la pénombre* (7) 「わたしには大切なのです、愛の神よ」 *Il m'est cher, Amour* (8) 「砂に書いた墓碑銘」 *Inscription sur le sable*.

(7) 二十世紀の詩人たち

- ・ブリモン男爵夫人 La Baronne Renée de Brimont : 『幻影』 *Mirages* (1919) 全4曲内訳→(1) 「水の上の白鳥」 *Cygne sur l'eau* (2) 「水に映る影」 *Reflets dans l'eau* (3) 「夜の庭」 *Jardin nocturne* (4) 「踊り子」 *Danseuse*.
- ・ド・ラ・ヴィル・ド・ミルモン Jean de la Ville de Mirmont (1886-1914) : 『幻想の水平線』 *L'Horizon chimérique* (1921) 全4曲内訳→(1) 「海は果てしなく」 *La mer est infinie* (2) 「僕は船に乗った」 *Je me suis embarqué* (3) 「月の女神ダイアナよ、セレーネーよ」 *Diane, Séléné* (4) 「船たちよ、僕たちは君たちを愛した」 *Vaisseaux, nous vous aurons aimés*.

- ・モンテスキウ伯爵 le Comte Robert de Montesquiou-Fezensac (1855-1921) : オーケストラの為の『パヴァーヌ』合唱は任意 *Pavane pour orchestre, avec chœur ad libitum* (合唱の詩, 1887).

(3) 台本作家たち

- ・ド・シューダン Paul de Choudens(?-1825) : 「シルヴィ」 *Sylvie* (1878).
- ・ヴィルデール Victor Wilder : 「降誕祭」 *Noël* (1885).
- ・ボルデーズ Stéphan Bordèse : 「祈りつつ」 *En prière* (1890).

(9) 知られざる詩人たち

- ・ポメ Louis Pomey (1831-1891) : 「夜明けの恋歌」 *Aubade* (1873).
- ・ビュッシーヌ Romain Bussine (1830-1899) : [1] 「トスカナのセレナーデ」 *Sérénade toscane* (1878?) [2] 「夢のあとに」 *Après un rêve* (1877).
* 2曲ともイタリア語からの仏訳。
- ・ドブラディス Georgette Debladis (生没年不詳) : 「平和がきた」 *C'est la paix* (1919).

(10) その他、参考として：合唱、付随音楽、オペラ等

- ・ラシーヌ Jean Racine (1639-1699) : 『ジャン・ラシーヌの賛歌』 *Cantique de Jean Racine* (1865).
- ・コラン Paul Collin : 『ヴィーナスの誕生』 *La Naissance de Vénus* (独唱、合唱、管弦楽, 1882).
- ・デュマ(父) Alexandre Davy de la Pailleterie, dit Dumas (1802-70) : 『カリギュラ』 *Caligula* (不随音楽, 1888).
- ・モリエール Jean-Baptiste Poquelin, dit Molière (1622-1673) : 「町人貴族のセレナーデ」 *Sérénade du Bourgeois Gentilhomme* (1893 遺作).
- ・レナック Théodore Reinach : 『アポロンへの賛歌』 *Hymne à Apollon* (2世紀のギリシャ語からの仏訳：独唱、ハーブ、フルート各1、およびクラリネット2本, 1894).
- ・マッケイル J.W. Mackail (生没年不詳) : 「メリザンドの歌」 *Melisande's song* (メーテルランク『ペレアスとメリザンド』より英訳台本の付随音楽, 1898).
- ・ロラン Jean Lorrain とエロル André-Ferdinand Hérold : 『プロメテウス』

Prométhée (歌劇-Tragédie lyrique, 1900).

- ・クレマンソー Georges Benjamin Clemanceau : 『幸せのヴェール』 *Le Voile du bonheur* (付随音楽, 1901).
- ・シェークスピア=ユゴー訳 : 『ジュリアス・シーザー』 *Jules César* (付随音楽, 1905).
- ・フォショワ René Fauchois : 『ペネロペ』 *Pénélope* (歌劇-Drame lyrique, 1907-12 [モンテ=カルロ初演, 1913]).

先駆者たち

◇ニーデルメイエル Louis Niedermayer (1802-1861)

フォーレの最初の師であるニーデルメイエル⁽¹⁾は、いち早くユゴーを発見した作曲家の一人であるが、彼が歌曲に使った詩の作者はほとんど後世にその名を遺す詩人たちである。なお、ユゴーとニーデルメイエルは共に1802年に生まれている。ニーデルメイエルは30曲ほどの歌曲を書いているが、サン=サーンスは彼を「古い色あせたフランスのロマンスの鋳型を壊し、ラマルチーヌやユゴーに想を得てドイツ・リートを凌ぐ新しい芸術のジャンルを想像した。『湖』の鳴り響く成功はグノーに、そしてこの道を目指すもの全員に新しい道を拓いた」⁽²⁾と、評価している。1851年に『歌曲十曲集』*10 Mélodies* を出版した。また、劇作家のドラヴィーニュや夭折の詩人ミルヴォワのようにロマン派を予告する作家・詩人、さらに、ドイツ、スペインの文学をフランスに紹介し、ロマン主義の機関誌「ラ・ミュズ・フランセーズ」*La Muse Française* の創刊者の一人であるデシャンの詩による歌曲も作曲している。

一方、十六、十七世紀の詩人としては、プレイヤド派のバイフや古典派演劇作者ラシーヌの詩による作品がある。このことから、若い弟子のフォーレがニーデルメイエル校の卒業作品として『ラシーヌの賛歌』を作曲しているが、師の感化があるいはあったかもしれない。

このほかに、楽譜出版社主であり、オペラの台本作者でもあり、ニーデルメイエルのオペラ「ストラデッラ」*Stradella* の台本をデシャンと共同執筆したパシーニの名を挙げておく。さらに、文学史上にその名を見ることのできない知られざる詩人による歌曲もある。知られざる詩人たちとは、『ラルース百科大辞典』*Grand Dictionnaire Encyclopedique Larousse*、『人名辞典』*Dictionnaire universel des noms propres* (Le Petit Robert 2)、『フランス文学辞典』

Dictionnaire des Litterature de Langue Française (Bordas)、『フランス文学辞典』(日本フランス語フランス文学会編・白水社)で探ることが出来ない詩人である。

(1) 十六、十七世紀の詩人たち

- ・バイフ Jean Antoine de Baif (1532-1589, 十六世紀プレイヤド派の詩人) : 「おお、つれなき女(ひと)よ」 *O ma belle rebelle*.
- ・ラシーヌ Jean Racine (1639-1699) : 「悲しむべきシオン」 *Deplorable Sion*.

(2) 前期ロマン派詩人たち

- ・ミルヴォワ Charles Hubert Millevoye (1782-1816) : 「瀕死の詩人」 *Le Poète mourant*.

若くして詩作をはじめ、18歳で『詩集』*Poësies* (1800) を出版。1804年よりリヨンのアカデミーで毎年受賞し、アカデミー・フランセーズでも受賞し、詩人として世に出る。2冊目の詩集『悲歌』*Élegies* (1812) を出版。古典派最後の詩人であるが、音楽性と自然への愛にロマン派の萌芽が見られる。

- ・デシャン Émile Deschamps (1791-1871) : [1] 「マルトの騎士」 *Le Chevalier de Malte* [2] 「異国の女」 *L'Étrangère* [3] 「それを望むなかれ」 *Ne l'espérez pas* [4] 「我、伯爵にあらずや」 *Que ne suis-je un comte* [5] 「わが望みのただ一つのもの」 *Seul Objet de mes vœux* [6] 「アペニン山脈の光景」 *Une Scène des Apénins*.

このほかにデシャンはニーデルマイエールにオペラ「ストラデッラ」書いている。

- ・ドゥラヴィーニュ Casimir Delavigne (1793-1843) : 「煉国の魂」 *L'Ame du Purgatoire*.

(3) ロマン派詩人

- ・ユゴー : [1] 「海」 *La Mer* [2] 「大洋」 *L'Océan* [3] 「この世では如何なる魂も」 *Puisqu'ici-bas toute âme* [4] 「夜宴の Rond」 *La Ronde du sabbat*.
- ・ラマルチエヌ Alphonse de Lamartine (1790-1869) : [1] 「湖」 *Le Lac* [2] 「秋」 *L'Automne* [3] 「孤独」 *L'Isolement* [4] 「人の声」 *La Voix humaine* [5] 「夜は静けさをつれてくる」 *La nuit ramène le silence* (原詩では *Le soir ramène...*).

(4) 台本作者

- ・パシーニ Emilien Pacini : [1] 「五月五日」 *Le Cinq Mai* (この詩はイタリアの詩人マンゾーニ Alessandro Manzoni 1785-1873の詩を仏訳したものである) [2] 「ジャヌ・グレイ」 *Jane Gray* [3] 「暁を見たまえ」 *Vois l'aurore* (レントラー [チロル地方の歌、踊り]).

(5) 知られざる詩人たち

- ・シャルルマーニュ C.de Charlemagne : 「柘榴(ざくろ)の音」 *Le Ton de Grenade* (シューダンス社刊1893).
- ・パルマ A.S.Palma : 「孤独」 *L'Isolement* (リシヨ Richault 社刊1884).

ニーデルメイエールの曲は有節歌曲とはいえ、ドイツ・リートの影響を受けて、各節で転調などがあり、ABA'の三部形式を採ることが多い。今までのロマンスよりもかなり複雑な変奏が使われている。

フランスでは、グドロン時代にも見られるとおり、一節目の旋律しか印刷されない習慣が長く続いた。ロマンスはこの形で歌われた。二節目からの伴奏はアド・リブで変奏したようであるが、有節形式はこの習慣から始まったといわれる。現在でも、教会音楽である賛美歌(特にプロテスタントの賛美歌)、世俗曲ではポピュラーなシャンソンなどの歌謡はこの形式を採っている。

◇ベルリオーズ Hector Berlioz (1803-1869)

ベルリオーズは標題音楽を創始し、「ある芸術家の生涯の物語」*Épisode de la vie d'un artiste* の副題をもつ『幻想交響曲』*Symphonie fantastique* (30年)で劇的効果を追求した。早くから作曲している。1819年から23年の王政復古の時代のさなかに独唱曲、重唱曲、三重唱曲の形で、「青春のロマンス」として七つのロマンスを作曲した。この時代ではまだロマン派の詩人の作品は扱われていない。革命時代に生き、若くして死んだフロリアンの名以外、ブルジュリとかデュ・ボワなど、我々の時代には調査が困難な作詞家の名が並んでいる。フロリアンの詩による歌曲は「友情よ、君の帝国を取り戻せ」*Amitié, reprends ton empire* である。

つづいて、1829年から30年にかけてトマス・ムア—Thomas Moore (1779-1852)の仏訳詩による『九つの歌曲』*Neuf Mélodies* を作曲し、1830年に出版した。ピアノの伴奏による独唱、重唱、合唱曲集である。後の1849年に、

『アイルランド歌曲集』*Irlande*(Op.2)と題し、上記の『九つの歌曲』という副題をつけた。今まで、ロマンス、シャンソンと呼ばれていた独唱曲を、メロディというようになったのは、このことに由来する。

なお、ムアーの詩はすでに仏訳されていて、フランスでかなり読まれていた。ベルリオーズがボン・ヌフの橋の上にたたずんで、夕日に輝くセヌ河の流れを見ながら、ムアーの詩の世界をさまよっている姿が、彼自身の著書『回想録』*Mémoires* (Garnier Flammarion, 1966, p.88)に描かれている。1826年のことである。その頃ムアーの詩の仏訳を見つけて夢中で読んだ、と記してある。なお、アイルランド出身のシェークスピア劇の女優で、後に彼の妻となるハリエット・スミスソン *Hariette Smithson* (1800-1854)との出会いの一年前である。

それから半世紀程の後の1874年に、デュパルクが仏散文訳で「悲歌」*Élégie*を作曲しているが、ベルリオーズの曲集の最後の曲と同じ題名であるが、異なる詩である。

(1) 革命時代の詩人

- ・フロリアン *Jean-Pierre Claris de Florian* (1755-1794)：「友情よ、君の帝国を取り戻し給え」*Amitié, reprends ton empire* (1823).

大叔父ヴォルテールに詩作の指導を受ける。ルイ十四世とモンテスパン夫人の子パンチエーヴル公 *Duc de Penthièvre* の小姓となる。公とは主従関係にあったが、友人でもあった。39年の短い生涯に寓話、小唄、小説、戯曲を書き、1786年にアカデミー・フランセーズの会員に選ばれる。革命勃発と共に気管支障害を病む。94年、思想的に疑惑を持たれ、投獄生活で衰弱し、釈放された後、没した。戯曲『二つの富くじ』*Les Deux Billets* (1779)で文壇に登場し、『ベルガモの双生児』*Les Jumeaux de Bergame* (1782)で、素朴で、おしゃべりで、善良なアルルカンをつくりだした。他に、『寓話詩』*Les Fables* (1792)がある。

(2) 前期ロマン派詩人

- ・デシャン：「鳥の罿」*Le Trébuchet* (? 1節目はベルタン作。2節目以下、デシャンの作)。

(3) 英国の詩人

- ・ムアー：『アイルランド歌曲集』全9曲内訳→(1)「日没」*Le Coucher du soleil* (テノール独唱) (2)「エレーヌ」*Helène* (ソプラノとアルトまたはテノール)

とバスの二重唱) (3)「軍歌」*Chant guerrière*(テノールとバス及び男声合唱) (4)「美しき旅する女」*La Belle Voyageuse*(メゾ・ソプラノ独唱) (5)「酒の唄」*Chanson à boire*(テノールと男声合唱) (6)「聖歌」*Chant sacré*(ソプラノまたはテノールと混声合唱) (7)「ハープの起源」*L'Origine de la harpe*(ソプラノまたはテノール独唱) (8)「さらば、ベッシー」*Adieu, Bessy*(テノール独唱) (9)「悲歌」*Élégie*(テノール独唱)。

このほかに、英詩の仏訳による歌曲はいくつかある。たとえば、シェークスピアの『ハムレット』から「オフェリアの死」*La Mort d'Ophélie*(ルグヴェ仏訳—ルグヴェの項参照)をはじめとした歌曲がある。ベルリオーズの師ル・シュウール Jean-Francois Le Sueur (Lesueur とも綴る。1760-1837)の影響が大きいと思われる。音楽家になることを父に反対されながら、パリ音楽院の図書館に出入りしていた頃から、ル・シュウールはベルリオーズの才能に気づいて、勇気づけた。ベルリオーズにとっての大恩人であり、彼は生涯師を敬愛していた。師ル・シュウールは、皇帝ナポレオンの信任を得て、音楽家として最高の地位である帝室礼拝堂の楽長に迎えられた。また、ナポレオンはル・シュウールに『オシアン』*Ossian*の作曲を依頼している。

(4) ロマン派の詩人たち

- ・ユゴー： [1]「海賊の歌」*Chanson de pirates*(1829紛失) [2]「囚われの女」*La Captive*(1832) [3]「湯浴みするサラ」*Sara la baigneuse*(1834)。

以上は『東方詩集』*Les Orientales*による。後の2曲は現存し、演奏され、CD録音もある。

- ・ラマルチーヌ：「朝の祈り」*La Prière du matin*。
- ・デュマ Alexandre Davy de la Pailleterie(1802-1870)： [1]「うるわしのイザボー」*La Belle Isabeau*。
- ・ミュッセ Alfred de Musset(1810-57)：「夜明けの恋歌」*Aubade*(1839)。
- ・ゲラン Georges Pierre Maurice de Guérain(1810-1839)：「あなたを信じ」*Je crois en vous*(1834)。

はじめ聖職者を志すが、ラムネーの宗教改革運動に加わっているとき断念する。その後、出身校であるコレージュ・スタニスラス Collège Stanislas で教鞭をとる。1838年に植民地生まれの娘と結婚するが、翌年結核で死亡。姉の手により遺稿集が編まれる。

- ・ブリズー Auguste Brizeux(1803-1858) [1]「ブルターニュの若い牧人」*Le*

Jeune Pâtre breton (1833) [2]「ブルターニュ人の歌」*Le Chant des Bretons* (1835).

ブルターニュのロリアン *Lorient* に生まれ、故郷を愛し、田園叙事詩『ブルターニュの人々』*Les Bretons* (1846) を書く。

・ルグヴェ *Ernest Legouvé* (1807-1903)：「オフエリアの死」(シェークスピアに倣って歌う譚歌)*La Mort d'Ophélie, ballade imitée de Shakespeare* (1847).

1832年に詩集『風変わりな死者たち』*Les Morts bizarres* を書いたが、後に小説、戯曲を執筆。戯曲に『アドリエヌ・ルクブルール』*Adrienne Lecouvreur*、『女の闘い』*Bataille de dames* などがある。

(5) 後期ロマン派詩人

・ゴーチエ：[1]『夏の夜』*Nuit d'été, Op.7* (ピアノ伴奏譜1841；オーケストラ版1856) 全6曲内訳→(1)「ヴィラネル」*Villanelle* (2)「薔薇の精」*Le Spectre de la rose* (3)「入り江にて」*Sur les lagunes* (4)「きみなくて」*Absence* (5)「墓場にて」*Au cimetière* (6)「見知らぬ島」*L'île inconnue*.

ゴーチエの『死の喜劇』*Comédie de la mort* の6篇の詩による連作歌曲で、ベルリオーズの歌曲では、現在でも演奏される機会の多い曲集である。その中でも「ヴィラネル」、「薔薇の精」、「きみなくて」は演奏会で最も聴く機会が多い。

(6) 民衆詩人

・ベランジェ *Pierre Jean de Béranger* (1780-1857)：「田園」*Les Champs* (1850).

(7) 知られざる詩人たち

・ルーヴァン *A. de Leuven*：「デンマークの狩人」*Le Chasseur danois* (1844).

・ボヴワール *Roger de Beauvoir*：「ザイード(ボレロ)」*Zaïde (Boléro)* 1845).

・ベルタン *Louise Bertin*：「鳥の罿」*Le Trébuchet* (? 1 節目のみ。以下、デシヤンの作)。

・ブルジュリ *Bourgerie*：[1]「泣き給え、哀れなコレット」*Pleure, pauvre Colette* (1822) [2]「五度の自由なカノン」*Canon libre à la quinte* (1818?-22).

・デュ・ボワ *Albert du Boys*：[1]「追放された山人」*Le Montagnard exilé* (1822?-23) [2]「あの人を愛したおまえ」*Toi qui l'aimas* (1823).

ベルリオーズの曲も、この時代の作曲家の例に見られるように有節歌曲であるが、長調—短調—長調など節毎に関係調に変わったり、あるいはかなり複雑な変奏を伴う手法を繰り返している。フランス歌曲を「メロディ」と名付けた作曲家でもあり、これらの作品を「ロマンス」と安易に呼ぶことは躊躇われるが、ロマンスからフランス歌曲 *Mélodie française* への発展は、次世代の作曲家の登場をまたねばならない。

すでに述べたとおり、十七、十八世紀にはフランスでは叙情詩の創作がそれ以前に比べて低調であったが、英国では詩作が盛んであった。十八世紀末から十九世紀にかけて、フランスではシェークスピアの演劇、スコット Walter Scott (1771-1832) の歴史小説、ワーズワース William Wordsworth (1770-1850)、バイロン George Gordon Noël, dit Lord Byron (1788-1824)、ムアー、シェリー Percy Bysshe Shelly (1792-1822) 等の詩人の作品が『フランス詩女神』誌 *La Muse française* をはじめとする文学雑誌に紹介されるようになった。

フランスの若いロマン派の詩人たちは、ドイツ文学と共に英国文学を知り、その影響のもとに詩作している。たとえば、ヴィニーは初期作品のほとんどにバイロンやムアーの詩の影響が見られる。

音楽家も当然この傾向に影響された。ベルリオーズやグノーの作品に英詩を使った歌曲が見られるのはこういう事情からであったと思われる。

つぎのグノー、ラロの時代になると、音の厚みが軽減され、フランスらしい軽妙さと均衡が音楽にあらわれてくる。

◇グノー Charles Gounod (1818-1893)

グノーは1839年にローマ賞を受賞して、ローマのヴィラ・メディチに滞在した。その頃、初期の歌曲を作曲しているが、真剣に聖職者になる決意をしていた。帰国後から1849年頃まで宗教音楽を作曲していた。ところが、ポーリーヌ・ヴィアルド（後にフォーレはそのサロンへ迎えらるる）に勧められて歌劇を作曲するようになった。処女作の『サフォ』 *Sapho* (1851) を皮切りに、『ファウスト』 *Faust* (1859)、『ロメオとジュリエット』 *Roméo et Juliette* (1867)、『サン＝マル』 *Cinq-Mars* (1877) など多数の歌劇を作曲したが、当時興行的に成功したのは『ロメオとジュリエット』だけであり、交響曲もミサ曲も歌曲もサロンの中で評価されるに過ぎなかった。しかし、『ファウスト』の第4幕の教会の場

面で流れる音楽はグノーの宗教音楽の真髄に触れたような感動を聞き手に与える。1870年から74年にかけてロンドンで英語(原語)やイタリア語(原語と仏訳並列)の詩による歌曲をそれぞれ14曲及び、15曲程書いている。⁽³⁾しかし、フランス語の詩による歌曲が圧倒的に多い。130曲程のフランス語の詩による歌曲があるといわれている。ただし、この中にはかなりの英語の仏訳詩によるものがある。たとえば、しばしば名曲として演奏される *Viens! les gazons sont verts* はロングフェローの *If thou art sleeping, maiden* が原詩である。一方、歌曲として集められているが、原曲は歌劇やオラトリオの詠唱を原曲とするものも数多い。たとえば、「おお、わが豎琴」*O ma lyre* は歌劇『ロメオとジュリエット』*Roméo et Juliette*、「聖なる陶醉」*Sainte ivresse* は「ミレイユ」*Mireille*、「トビアの帰還」*Le Retour de Tobie* はオラトリオ『トビア』*Tobie* を原曲とするものである。

注(1)、(2)に記した『歌曲とリートの手引き』やオネゲルの『音楽事典』によれば、グノーの歌曲は、シューダンス社から67年から80年までに作曲された歌曲を集めた5巻が『20曲集』と題されて、出版されている。他に英詩の仏語訳を含んだ曲集、ピース版としての12曲などがある。さらに、15曲の『二重唱曲集』、『子どものための曲』や多数の宗教曲があるが、ここでは歌曲のみを扱う。

このように、歌劇の中から採った歌曲もあるので、オジエ、バルビエ、カレなど、台本作家の手になる詩がきわめて多い。いずれにしても、非常に多種多様な方面の出身の詩人が歌詞の提供にあたっているの、調査できた範囲で整理し、以下、箇条書きで記す。

(1) 十六、十七世紀の詩人たち

- ・バイフ Baif：「おお、わたしのつれなきひと」*O ma belle rebelle* (1850)。
- ・パスラ Jean Passerat (1534-1602)：「五月の第一日」*Le Premier Jour de mai*。

ユマニストの詩人で、王立教授団の雄弁の教授となる。講義は好評であったが、カトリック同盟により中止させられた。反カトリック同盟の政治パンフレット『サチール・メニッペ』*Satire Ménippée* (1594)の執筆者の一人である。

- ・ラ・フォンテーヌ Jean de La Fontaine (1621-1695)：[1]「二羽の鳩」*Deux Pigeons* (1883) [2]「黄金でも、偉大さでもなく」*Ni l'or ni la grandeur* [3]「全世界は愛に従う」*Tout univers obéit à l'amour* (1893)。

『寓話集』*Fables* で名高い詩人である。

・ラシーヌ：「君を愛する一つの心より」(『アタリー』*Athalie* より) *D'un cœur qui t'aime*(1872)。

(2) 前期ロマン派詩人

・ミルヴォワ：「よしきり」*La Fauvette*(1830?)。

(3) ロマン派の詩人たち

・ユゴー：[1]「夜明けの恋歌」*Aubade* [2]「セレナーデ」*Sérénade*(1857—戯曲『マリー・スチュアート』より)。

・ラマルチーヌ：[1]「ただひとり! (死者たちへの想い)」*Seul!* (*La Pensée des morts*) [2]「谷」*Le Vallon*(1842?) [3]「夕べ」*Le Soir* [4]「孤独」*Solitude* [5]「夜鷺へ」*Au Rossignol*。

・ミュッセ：[1]「日の出」*Le Lever* [2]「ヴェネチア」*Venise*。

・小デュマ Alexandre Dumas fils(1824-1895)：[1]「ひなぎく」*La Pâquerette* [2]「あなたが窓を開かないなら」*Si vous n'ouvrez votre fenêtre* [3]「祝辞」*Compliment*(1876)。

・エルネスト・ルグヴェ：[1]「我が翼よ、落ちろ!」*Tombez mes ailes!* [2]「神殿よ、開け」*Temple, ouvre-toi*。

* 演劇『二人の女王』*Les Deux Reines*(舞台音楽1873)の台本も書いている。

(4) 後期ロマン派詩人

・ゴーチエ：[1]「春」*Primavera* [2]「何処へ行くの?」*Où voulez-vous aller?* [3]「漁夫の歌」*La Chanson du pêcheur*(1841)。

(5) 高踏派詩人たち

・バンヴィル Théodore de Banville(1823-1891)：[1]「天使の魂」*L'Âme d'un ange*(イタリア語訳並記)。

・コペ François Coppée(1842-1908)：[1]「四月の歌」(通行人の小夜曲)*Chanson d'avril*(*Sérénade du passant*) [2]「憂愁」*Mélancolie*(1879-80)。

・シュリ・プリュドム：「祈り」*Prière*(1876)。

(6) 象徴派詩人

・リシュパン Jean Richepin(1849-1926)：「鳥もちの歌」*La Chanson de la*

glu (1883).

(7) 民衆詩人

・ベランジェ：[1]「田園」*Les Champs* [2]「さまよえるユダヤ人」*Le Juif errant* (1860?) [3]「わたしの衣服」*Mon Habit* (1855).

(8) 台本作家等⁽⁴⁾

・オージェ Emile Augier (1820-1889)：[1]「ある娘に」*A une jeune fille* [2]「花の贈り物」*Envoi de fleurs* [3]「木陰で飲む」*Boire à l'ombre* [4]「お財布に」*À une bourse* [5]「出発」*Départ* [6]「牧人の歌」*Chanson de Pâtre* [7]「おお、わが豎琴」*O ma lyre* [8]「姉妹たちよ、愛しあおう」*Aimons, mes sœurs*.

* 歌劇『サフォ』(1851)の台本を書いた。

・バルビエ Jules Barbier (1825-1901)：[1]「メデ」*Medjé* [2]「夜の賛歌」*Hymne à la nuit* [3]「春に」*Au Printemps* [4]「クリスマス」*Noël* [5]「山の上で」*Sur la montagne* [6]「我が心はきみのもの」*A toi mon cœur* [7]「お気をつけ！」*Prends garde!* [8]「ボレロ」*Boléro* [9]「愛し合おう」*Aimons-nous!* [10]「夢想」*Rêverie* [11]「マドンナへ」*A la madone*.

* 演劇『ジャンヌ・ダルク』*Jeanne d'Arc* (舞台音楽1873)の台本。

・カレ Michel Carré (1819-1872)：[1]「マガリ」*Magali* [2]「聖なる陶酔よ」*Sainte ivresse* [3]「わたしの涙への憐れみ」*Pitié pour mes larmes*.

・バルビエとカレ Jules Barbier (1825-1901) et Michel Carré (1819-1872)：[1]「女神なるか、女なるか」*Déesse ou Femme* [2]「白鳩」*Blanche Colombe* [3]「朝の女王」*La Reine du matin* [4]「鳥たちよ、おだまりませい」*Oiseaux! Taisez-vous!* [5]「生けるものは、見るだろう」*Qui vivra verra!* [6]「シルヴィ」*Sylvie* [7]「バッカスの巫女たち」*Les Bacchantes* [8]「奴隷と女王」*Esclave et Reine* [9]「あの人のことを話したまえ」*Parle-moi d'elle*.

* 歌劇『嫌々ながら医者にされ』*Le Médecin malgré lui* (モリエールの喜劇の翻案-1858)、『ファウスト』*Faust* (1859)、『フィレモンとボシス』*Philémon et Baucis* (1860)、『白鳩』*La Colombe* (ラ・フォンテーヌからの翻案-1860)、『シバの女王』*La Reine de Saba* (1862)、『ミレイユ』*Mireille* (1864)、『ロメオとジュリエット』*Roméo et Juliette* (1867)、『ポリュクト』*Polyeucte* (1878-コルネイユからの翻案)の台本。

- ガレ Louis Gallet(?) : 「かわいいひと」 *Mignon*.
- ポワルソンとガレ Poirson et Gallet : 「静かな夜」 *Nuit silencieuse*.
 - * 歌劇『サン＝マル』 *Saint-Mars* (1877) の台本。
- スクリープとドラヴィーニユ Scribe et Delavigne : 「静けさ」 *Le Calme* (『血まみれの修道女』より)。
 - * 歌劇『血まみれの修道女』 *La Nonne sanglante* (1854) の台本。
- ポンサール François Ponsard (1814-1867) : [1] 「泉の妖精ナイアード」 *Les Naiades* [2] 「ユーリクレイア(オデッセウスの乳母)の歌」 *Le Chant d'Eury-clée*.
 - * 十九世紀の流行劇作家で、演劇『ユリシーズ』 *Ulysse* (舞台音楽) の台本。[1] [2]とも『ユリシーズ』より。
- ルフェーヴル H. Lefevre : 「トビアの帰還」 *Le Retour de Tobie*.
 - * オラトリオ『トビア』 *Tobie* (1866) の台本。

以下に詩人については調査未了で、いずれに分類すべきか不明であるが、トゥルヌーの「春の歌」などグノーの歌曲で重要な作品も含まれているので、詩人を挙げておく。

(9) 知られざる詩人たち (以下、生没年不詳)

- トウルヌー Tourneux : [1] 「春の歌」 *Chanson de printemps* (1849).
- バルビエ Pierre Barbier : [1] 「若き水夫の出発」 *Le Départ du mousse*.
- ベルタン Louise Bertin : [1] 「もしも死が目的ならば」 *Si la mort est le but*.
- シューダンス Paul de Choudens⁽⁵⁾ : [1] 「石のベンチ」 *Le Banc de pierre*.
- ゴズラン Leon Gozlan : [1] 「その花をくれたまえ」 *Donne-moi cette fleur*.
- デルピ Albert Delpit (1849-1893) : [1] 「望みはなし」 *Je ne puis espérer* [2] 「歌い、そして、苦しむ」 *Chanter et souffrir*.

デルピは大デュマ秘書であったが、大デュマが刊行した雑誌の寄稿者でもあった。小説『コラルーの息子』 *Le Fils de Coralie* (1879) がある。

- セギュール伯爵 Comte A. de Ségur : [1] 「空は大地を訪ねた」 *Le ciel a visité la terre* [2] 「不在」 *Absence* [3] 「子どもたちの聖母」 *Notre-Dame des enfants* [4] 「マリアさまのみ名」 *Le Nom de Marie*.
- ペイール L. de Peyre : 「きみなくてわたしは如何に」 *Ce que je suis sans*

toi.

- ・コラン Joseph Collin：「思い出」 *Souvenir*.
- ・マニュエル Eugène Manuel： [1]「夕べの祈り」 *Prière du soir*.
- ・ポルト A. Porte：「ナザレのイエス」 *Jésus de Nazareth* (1840頃).

(10) 自作詩

[1]「アヴェ・マリア」 *Ave Maria* [2]「秋の歌」 *Chant d'Automne* [3]「エルサレム」 *Jérusalem*.

歌曲の多くは台本作家や民衆詩人や現在では知られていない詩人たちの作品によっているが、一方で、英詩を原語ないし仏訳で作曲している例もある。フランス詩では、古くはプレイヤド派の詩人の作品に、新しくは象徴派詩人の作品に作曲している。長命であったことにもよろうが、文学史的に幅広く詩を求めた姿勢が見られる。

グノーは自作の詩に作曲した作曲家でもある。このあと、サン＝サーンス、ドビュッシー、ラヴェル等も自作の詩に作曲を試みる。

◇フランク César Franck (1822-1890)

父はオーストリア系のベルギー人で銀行家、母はドイツ人、という両親のもとで、フランクはリエージュで生まれた。リエージュの音楽院でピアノを学び、11歳で卒業する。1835年一家でパリへ出たので、13歳でパリ音楽院に入り、ピアノ、オルガン、作曲を学び、優秀な成績をおさめた。作曲家を志したが、父の反対で演奏家になる。しかし、40年代のパリは政治的不安で生活は苦しかったことと、父の意に反した結婚をしたので、生活のために、51年には、サン＝ジャン＝サン＝フランソワ＝デュ＝マレ Saint-Jean Saint-Francois-Malais 教会(現在のパリ3区シャルロ通り Rue Charlot にある)、58年にはサント＝クロチルド Sainte Clotilde(パリ7区ラス・カーズ通り Rue Las Cases にある)のオルガン奏者となり、即興演奏の名手として知られるようになった。しかし、生活が苦しく、出来る限り弟子をとり、未明に起きて作曲を続けた、という逸話が残っている。1871年にはサン＝サーンス、ビュッシーヌ、フォーレ等と国民音楽教会 Société National de Musique(以下SNMと略す)の設立に尽力する。作曲家として名曲を遺し、フランキストと呼ばれる後進の作曲家を世に出した。ダンディ、デュパルク、ショソンたちである。彼らはフランス音楽の次

代を担うすぐれた作曲家である。

フランクは生活苦と闘っていた初期と円熟期にわかれて集中的に歌曲を残している。

習作期(1845-60)

(1) 革命時代の詩人

- ・フロリアン： [1] 「ロバン・グレイ」 *Robin Gray* (1845頃) .

(2) ロマン派の詩人たち

- ・シャトーブリアン： [1] 「追憶」 *Souvenance* .
- ・ユゴー： [1] 「幕屋をひろげる大地にて」 *A cette terre où l'on ploie sa tente* (1847) [2] 「もしも素敵な芝生があれば」 *S'il est un charmant gazon* (1855-57) [3] 「いつでも通りたまえ」 *Passez, passez toujours* (1860頃、および1872) [4] 「薔薇と蝶々」 *Roses et Papillons* (1860頃、および1872) .
- ・ミュッセ： [1] 「ニノン」 (乙女たちは何を夢見るか) *Ninon (A quoi rêvent les jeunes filles* の中の自由詩「声」 *La Voix* による) .
- ・大デュマ： [1] 「空気の精」 *Le Sylphe* (1845頃) .

(3) 忘れられた詩人たち

- ・ルブル Jean Reboul (1796-1864)： 「天使と子供」 *L'Ange et l'Enfant* (1846)
ルブルは通称ニームのパン屋。錠前屋の息子で、11歳半で代訴人の見習いになるが、未亡人の母を助けるため実入りのいいパン屋の見習いになる。同時に詩を書き、文学カフェや公衆の前で自作を読んだ。1828年に『天使と子供』 *L'Ange et l'enfant* を書き、シャトーブリアン、ラマルチーヌ、大デュマの賞賛を得た。36年に『詩集』 *Poésies* を出版。一時パリへ出てきたが、静かな生活を求めて、ニームでパン屋をしながら、詩作をする。
- ・メリ Joséph Méry (1798-1867)： 「ベンガドール將軍」 *L'Emir de Bengador* (1845年頃)、「愛する」 *Aimer* (1849年)

メリはマルセイユ出身のジャーナリスト、小説家、詩人。ヴォルテールを読んで、神学校を放校になる。イタリア、コンスタンチノーブルなどへ旅行した後、ロマン派の詩人でもあったラップ Alphonse Rabbe (1786-1829) と自由主義の新聞『フォセアン』 *Le Phocéen* (マルセイユ人の意) を発行するが、数々の訴訟事件を起こす。26年に、同郷のバルテルミとの共著風刺詩『ラ・ヴィレリア

ド』*La Villéliade* で評判を呼ぶ。ゴーチエが文体の力強さ、韻律の完璧さを評価する。30年以降は詩作をやめて、小説、戯曲を書くようになる。

円熟期(1871-89)

(1) ロマン派詩人

- ・デボルド＝バルモール Marceline Desbordes-Valmore (1786-1859) : [1]「夜の鐘」*Les cloches de soir* (1888) [2]「ロルモンの踊り」*Les Danses de Lormont*.

(2) 高踏派詩人

- ・シュリ・プリュドム : 「こわれたかめ」*Le Vase brisé* (1879).

- (3) ・ドーデ Alphonse Daudet (1840-97) : [1]「幼き子らへ」*Aux petits enfants*
[2]「飼い葉桶の聖母」*La Vierge à la creche*.

(4) 知られざる詩人たち

- ・ダヴィド E. David : 「薔薇の結婚」*Le Mariage des roses* (1871).
- ・パテ Lucien Pate : 「リート」*Lied*.
- ・フルコー L. de Fourcaud : 「夜曲」*Nocturne*.
- ・ブリズー Charles Briseux : 「行列」*La Procession*.

ベルリオーズに詩を提供したオーギュスト・ブリズー Auguste Brizeux とは別人である。

習作期の作品では、ベルリオーズの歌曲の詩の提供者である大革命時代の詩人フロリアン、ロマン派詩人としてはシャトーブリアン、ユゴー、ミュッセ、大デュマの詩による歌曲がある。さらに、十九世紀前半に作品を発表し、今日では文学史の前面から去ってしまった詩人たちの詩による作品もある。一方、円熟期になると、ロマン派詩、高踏派詩に作曲しているが、度々演奏される曲

の中には、今日ほとんど調査不可能な知られざる詩人の作品をつかっている。

◇ラロ Édouard Lalo(1823-1892)

ラロはスペイン系の血統を引いているが、フランドル地方のリル Lille で生まれる。リルの音楽院でヴァイオリンとチェロの手ほどきを受け、やがて、1839年に、パリ音楽院に入り、ヴァイオリンと作曲を学ぶ。45年頃から作曲を始め、49年にシャンソンの詩人でもある民衆的な詩人ペランジェの詩で作曲した『六つの民衆的ロマンス』*Six Romances populaires* を発表し、室内楽曲も作曲した。さらに、55年頃にはユゴーの詩よる『六つの歌曲』*Six Mélodies* を作曲したが認められなかったので、ラロはその創立者の一人であるが、アルマンゴ＝ジャカール四重奏団 *Quatuor Armingaud-Jacquard* のヴィオラ奏者となった。65年にアルト歌手のジュリ・ベルニエ・ド・マリニ *Julie Bernier de Maligny* と結婚してから、声楽曲の作曲を再開した。67年に、リリック座のコンクールに、シラーの戯曲によるオペラ『フィエスク』*Fiesque* を書いて応募し、3位に入賞した。オペラ自体は上演されることはなかったが、オペラの中の個々の曲が評判になった。たとえば、バレエ音楽が『嬉遊曲』*Divertissement* と題され、コンセル・ポピュレールで演奏され、評判になった。さらに、74年には、ヴァイオリンの名人芸で評判をとっていたサラサーテ *Pablo de Sarasate* (1844-1908) の注文中で『ヴァイオリン協奏曲』*Concerto pour violon* へ長調と『スペイン交響曲』*Symphonie espagnole* で評判をとった。82年には、バレエ『ナムーナ』*Namouna* をオペラ座で上演した。この音楽はドビュッシーを夢中にさせた、という逸話が残っている。88年には、ブルターニュの伝説を題材にしたオペラ『イスの王』*Roi d'Ys* (1879-1888) を作曲し、オペラ＝コミック座で上演した。

歌曲は個々に出版され、散逸し、正確な数はわかっていない。1988年にユージェル社からラロの校訂版を書いたフォケ J.-M. Fauquet によれば、23曲ということであるが、ここでは調査できた範囲で記す。

(1) ロマン派詩人たち

- ・ユゴー：[1]『六つの歌曲』Op17(作曲1855、登録1856)内訳→(1)「ギター(彼らは何と言っていたのか?)」*Guitare(Comment disaient-ils?)* (2)「この世ではすべての魂が」*Puisqu'ici-bas, toute âme* (3)「暁は生まれ」*L'aube naît* (4)「微笑み、与える神」*Dieu qui sourit et qui donne* (5)「おお、

わたしが眠るとき」*Oh! quand je dors* (6)「友よ、おおいに騒ごう」*Amis, vive l'orgie* [2]「思い出」*Souvenir* (作曲1870、刊行1872) [3]「酒の歌」*Chanson a boire*.

- ・ラマルチヌ： [1]「目覚めたときの坊やの祈り」*Prière de l'enfant à son réveil* [2]「来たれ」*Viens!*
- ・ミュッセ： [1]「花に寄せて」*A une fleur* [2]「ラ・ズエッカ」*La Zuecca* [3]「月に捧げるバラード」*Ballade à la lune* [4]「バルブリーヌの歌」*Chanson de Barberine*.

(2) 後期ロマン派詩人

- ・ゴーチエ：「奴隷」*L'Esclave*.

(3) 高踏派詩人たち

- ・シルヴェストル： [1]「去り行く女(ひとに)」*A celle qui part* [2]「悲しみ」*Tristesse*.
- ・トゥリエ André Theuriet (1833-1907)： [1]「航海」*Marine* [2]「藪の奥で」*Au fond des halliers* [3]「こまどり」*Le Rouge-gorge*.

トゥリエは大蔵省退官後詩作をはじめ、『現代高踏派詩集』(1866年)にも作品を発表している。アカデミー賞受賞の詩集『森の道』*Les Chemins des bois* (1867)の後、田園、家庭小説を書く。『森の下』*Sous bois* (1878)、『両バルボ一家』*La Maison des deux Barbeaux* (1879)等がある。『両バルボ一家』は1882年に韻文劇に書き改められる。

(4) 台本作家たち

- ・ヴィルデール Victor Wilder：「夜明けの恋歌」*Aubade*。
フォーレの歌曲「降誕祭」の詩人ヴィルデールである。
- ・ボキエ C. Beauquier (生歿年、生涯不詳)：「ユモレスク」*Humoresque*.
- ・デルピ Albert Delpit (1849-1893)：「ブルターニュの歌」*Chant breton*.

ラロの歌曲作品の数は少ないが、そのほとんどは文学史上に名を遺した詩人たちの作品を使っている。特にユゴーの詩による歌曲はいずれもドイツ・リートの影響が垣間みられるが、洗練された美しいフランスのロマンスである。

◇サン＝サーンス(1835-1921)

生まれて3ヶ月で父を失った。叔母から2歳半でピアノの手ほどきを受け、きわめて音感が優れていて、3歳半で作曲を始めたと言われている。1849年にパリ音楽院入り、オルガンと作曲を学んだ。サン＝セヴラン Saint-Séverin、サン＝メリ教会 Saint-Merri を経て、57年にはマドレーヌ寺院のオルガン奏者になる。作曲でローマ賞受賞者にはならなかったが、非常に多作で、生涯にわたってあらゆるジャンルの音楽を作曲した。はじめは協奏曲を書いていたが、当時のパリではオペラで成功しなければ作曲家として認められなかったので、多数のオペラを作曲した。パリ国立図書音楽館資料室(以下、BN 資料室と略す)で調査したところ、いわゆる劇場音楽の内訳は、オペラ15本、バレエと舞台付随音楽各1本、音楽劇5本で、計22を数えた。しかし、その中で『サムソンとデリラ』*Samson et Dalila*(1867-72)は今日では最も知られている作品である。

一方、名演奏家(ヴィルトゥオーソ)の誉れが高く、ヨーロッパ各地はもちろん、アフリカ、南北アメリカへも行き、演奏活動をした。没したのは演奏旅行中のアルジェであった。

また、1861年から65年までニーデルメイエル校でピアノを教え、フォーレ、メサジェ、ジグ等の弟子を育てている。

約120曲の歌曲を書いたといわれるが、BN 資料室で調査したところ106曲が判明した。詩人もシャルル・ドルレアンに始まり、ヴェルレーヌ、ジャン・モレアス、ノアイユ伯爵夫人に至っている。もちろんそのほかに、オペラ等の台本作者、サロン等で出会う無名の詩人たちの詩もかなりある。また、グノーと同様に彼自身詩を書き、作曲している。以下、内訳を記しておく。作曲、刊行年はわかる限り記す。

(1) 中世、十六、十七世紀の詩人たち

中世の詩人としてはシャルル・ドルレアンの詩による歌曲が1曲あるのみである。

- ・シャルル・ドルレアン Charles d'Orleans(1391-1465)：[1]「新しい時」*Temps nouveau*.

十六世紀の詩人では、プレイヤド派の詩人ロンサール、レミ・ベロ、プレイヤド派の影響を受けて詩作したヴォ克蘭・ド・ラ・フレネがいる。

- ・ロンサール：[1]『ロンサールの五つの詩』*Cinq Poèmes de Ronsard* 内訳
→(1)「鳥の姿をした愛の神」*L'Amour oyseau* (2)「傷ついた愛の神」*L'*

Amour blessé (3) 「聖ブレーズへ」 *A Saint-Blaise* (4) 「おでぶちゃんと
瘦せっばち娘」 *Grasselette et Maigrette* (5) 「不幸な恋人」 *L'Amant mal-
heureux*.

- ベロ Remy Belleau(1528-1577)：「四月」 *Avril*.
- ヴォークラン・ド・ラ・フレネ Vauquelin de la Fresnaye(1536-1606または
1608)：「ヴィラネル」 *Villanelle*.

十七世紀の詩人では、劇作家のキノ、デトウシュ、及び、『風刺詩集』*Satires*
や『詩法』*Art poetique* で名高いボワローの詩がそれぞれ一篇ずつ歌曲になっ
ている。

- キノ Philippe Quinault(1635-1688)：「夜曲」 *Nocturne*.
- デトウシュ Destouches(1680-1754)：「牧歌」 *Pastorale*.
- ボワロー Nicolas Boileau(1636-1711)：「昔の酒の歌」 *Chanson à boire du
vieux temps* (1889、デュラン社刊).

(2) ロマン派の詩人たち

ユゴーの詩による歌曲は BN 資料室で調べでは18曲であるが、ラストールに
よれば⁽⁶⁾、それより多い。そのほかのロマン派の詩人による歌曲は以外に少な
い。

- ユゴー： [1] 「森の小鳥の歌を聴いてどうなろう」 *A quoi bon entendre les
oiseaux des bois* [2] 「期待」 *L'Attente* [3] 「海に出て行く男たちの歌」 *Le
Chant de ceux qui s'en vont sur mer* [4] 「城主の狩りの歌」 *La Chasse
du burgrave*⁽⁷⁾ [5] 「鐘」 *La Cloche* [6] 「てんとう虫」 *La Coccinelle* [7]
「誘拐」 *L'Enlèvement* [8] 「恍惚」 *Extase* (Puisque j'ai mis ma lèvre...)
[9] 「鼓手の婚約者」 *La Fiancée du timbalier* [10] 「目には見えない笛が」
Une flûte invisible [11] 「ギター」 *Guitare* [12] 「夢想」 *Rêverie* (Puisqu'
ici-bas...) [13] 「朝」 *Le Matin* (L'aurore s'allume) [14] 「ジャン王の軍
隊の行進」 *Le Pas d'armes du roi Jean* [15] 「もしも素敵な芝生があれば」
S'il est un charmant gazon [16] 「わたしに告げることがないならば」 *Si
vous n'avez rien à me dire* [17] 「シュゼットとシュゾン」 *Suzette et Suzon*
[18] 「来たれ、目には見えない笛が」 *Viens, une flûte invisible* (二重唱).
- ラマルチャーヌ：「湖」 *Le Lac*.
- タスチュ夫人 Mme Tastu, 旧姓 Sabine Casimire Amable Voiart
(1798-1885)： [1] 「ポプラの葉」 *La Feuille du peuplier* [2] 「嘆き」 *Plainte*.

18歳で新聞印刷業者と結婚する。早くから詩作を続け、1826年に『詩集』*Poésies* を出版の後、中世、フロンドの乱、百日天下などをテーマに『フランス年代記』*Chroniques de France* (1829) を発表する。1835年に『新しい詩』*Poésies nouvelles* を刊行するが、それ以降文学作品を書かない。夫の事業の失敗のため生活の資を得るために翻訳、フランス史、フランス、イタリア、ドイツ文学史などを執筆する。夫の死後、外交官の息子について中近東へ行く。パリ・コミューンの時パリへ戻り、郊外のパレゾーPalaiseau で隠棲生活に入る。

- ・サントブーヴ Charles-Auguste Sainte-Beuve (1804-1869) : 「青い片隅で」
Dans les coins bleus.
- ・ルグヴェ : [1] 「オフェリーの死」 *La Mort d'Ophélie* [2] 「マリア・ルクレツィア」 *Maria Lucrezia.*

サン＝サーンスはロマン派の詩人ではユゴーを特に愛読していた。従って、ユゴーの詩による歌曲は多数あるが、そのほかのロマン派詩には意外にも作曲していない。フォーレはサン＝サーンスの影響で「蝶と花」をはじめとして、未出版、消失の曲を含めて11曲作曲した。後期ロマン派のゴーチエを除くロマン派詩人の詩には作曲しなかったのも、サン＝サーンスの影響と言えるかも知れない。

(3) 高踏派詩人たち

- ・バンヴィル Théodore de Banville (1823-1891) : [1] 「愛し合おう」 *Aimons-nous* [2] 「妖精たち」 *Les Fées* [3] 「うぐいす」 *Le Rossignol.*
- ・マンデス : 「月の光」 *Clair de lune.*
- ・コペ : 「侯爵夫人、覚えておいでですか」 *Marquise, vous souvenez-vous.*
- ・カザリス Henri Cazalis (筆名ラオール Jean Lahor) : [1] 「おまえの心に」 *Dans ton cœur* (デュパルクの「悲しい歌」と同じ詩) [2] 「死の舞踏」 *La Danse macabre.*

カザリスは医学、哲学、文学、歴史、美術、音楽などあらゆる方面の著述があり、高踏派の詩人で、詩集『幻想』*L'Illusion* (1888) がある。概ね医学、哲学以外はジャン・ラオールの筆名を使用しているが、デュラン Durand 社刊の楽譜にはカザリス詩となっている。

また、サン＝サーンスとは画家のアンリ・ルニョ Henri Regnault (1843-71) を通じて知ったのであろう。ルニョとカザリスはナポレオン校 Lycée Napoléon

(現在のアンリ四世校 Lycée Henri IV)以来の友人である。なお、サン＝サーンスはルニョたちと1866年にブルターニュのサン＝タンヌ＝ラ＝パリュ Saint-Anne-La-Palud へパルドン祭を見に行く。サン＝サーンスはレンヌのサン＝ソヴール教会にオルガニストとして赴任していたフォーレを誘っている。⁽⁸⁾

(4)・エカール Jean Aicard(1848-1921)：「なるようになれ」 *Vogue, vogue la galère* (舟歌－二重唱)。

エカールはトゥロン Toulon の出身で、高踏派の詩人たちと同世代に属する。プロヴァンスの地方色豊かな詩情に溢れる作品を書いた詩人である。『若き信仰』 *Les Jeunes Croyances* (1867)、『プロヴァンスの詩』 *Poèmes de Provence* (1874)などの詩集がある。ほかに戯曲『ボナール神父』 *Le Père Lebonnard* (1889)、小説『王様の外套』 *Le Manteau du Roi* (1907)などがある。

(5) 象徴派詩人たち

・ヴェルレーヌ Paul Verlaine(1844-1896)：「野原に吹く風」 *Le Vent dans la plaine* (C'est l'extase languereuse で始まる『忘れられた小歌』 *Ariettes Oubliées* の第一歌。デュラン社刊1913年であるが、作曲年代不詳)。

・モレアス Jean Moréas(1856-1910)：「樹木」 *L'Arbre*

アテネ生まれのギリシャ人であるが、1882年よりパリを詩作の場とする。始め退廃派詩人として『浮き州』 *Les Syrtes* (1884)を発表するが、象徴派運動に参加して『カンチレーヌ』 *Les Cantilènes* (1886)を発表する。後、ギリシャ・ラテンの伝統に帰り、『恋の巡礼』 *Le Pèlerin passionné* (1891)を始めとする作品を発表したのち、詩集『スタンス』 *Les Stances* (1899-1920)を完成するにいたる。

(6) 二十世紀の詩人

・ノアイユ伯爵夫人 Anne Princesse Brancovan, Comtesse Mathieu de Noailles(1876-1933)：[1]「ロマンチックな夕べ」 *Soir romantique* [2]『夕べのヴィオロン』 *Violons dans le soir* (共にデュラン社刊1907)。

ルーマニアの名家の出自で、パリに生まれる。『百千の心』 *Les Cœurs innombrables* (1901)でアカデミー・フランセーズ賞受賞。社交界の名流夫人で、そのサロンは二十世紀初頭の文壇に大きな影響を持っていた。ほかに、詩集『永遠の力』 *Les Forces Éternelles* (1920)、『苦しむという名誉』 *L'Honneur de souffrir* (1927)、小説『新しい希望』 *La Nouvelle Espérance* (1903)、『支配』 *La*

Domination などがある。

(7) 台本作家たち

- ・バルビエとカレ：[1]「目覚めた小鳥に訊ねなさい」*Demande à l'oiseau qui s'éveille* [2]「幸せは軽やかなもの」*Le bonheur est chose légère* [3]「蝶々と星」*Le Papillon et l'étoile*、[4]「ナポリの歌」*Chanson Napolitaine*。

音楽劇 *Drame lyrique* 『銀の鈴』*Le Timbre d'argent* (1877年初演)の台本を書いている。

- ・ボルデーズ：『十字架の予告』*Présage de la croix* (『不思議な話』*Contes mystiques* より)。

ボルデーズに関しては、「ガブリエル・フォーレと詩人たち」(藤原書店)参照。ただし、この曲(デュラン・エ・シェーネヴェルク社刊 *Durand et Schœnewerk*)と登場人物二人の劇 *scène dramatique* の『ロラ』*Lola* (デュラン・エ・フィス社刊 *Durand et fils*)は1891年に刊行され、フォーレの「祈りつつ」*En Prière*の作曲年とデュラン社刊が1890年であることから、師弟は同じ頃ボルデーズの詩に関心を寄せた、と推測する。

- ・クローズ J.-L. Croze：[1]「彼方に」*Là-bas* (デュラン・エ・フィス社刊1892)、[2]賛歌「パラス=アテネ」*Hymne Pallas-Athénée* (1894年のオランジュ市で上演。同社刊1894年)、[3]「おそらく」*Peut-être* (デュラン社刊1899)、[4]「何故、ひとりぼっちなの、ワットーの羊小舎よ」*Pourquoi rester seulette! Bergerie Watteau* (刊行年不詳)。

クローズは一幕三場のバレエ『ジャヴオット』*Javotte*の台本作者。

- ・ガレ Louis Gallet：『デジャニール』の「祝婚歌」*Épithalame de Déjanire* サン=サーンスはガレの台本で、あるいはガレと共作の台本でオペラを多数作曲している。オペラ『アスカニオ』*Ascanio* (5幕7場、デュラン・エ・シェーネヴェルク社刊)、『デジャニール』*Déjanire* (4幕悲劇、1898年初演台本共作)、『エチエンヌ・マルセル』*Etienne Marcel* (1879年初演)、『黄色の王女』*La Princesse jaune* (1幕オペラ・コミック)がある。

- ・ルメール Ferdinand Lemaire：[1]「悲しみ」*Tristesse* (リショ社刊 *Richault* 1877)、[2]「思い出」*Souvenances* (同社刊1899)。

ルメールはサン=サーンスのオペラ『サムソンとデリラ』*Samson et Dalila* (3幕1867-72作曲、デュラン・エ・シェーネヴェルク社刊1878)の台本作者である。

(8) 知られざる詩人たち

知られざる、というのはあくまでも、筆者が調査した結果、調べることが出来なかった詩人である。なお、フォーレの「夢の後に」などの例があるように、後世に残る歌の歌詞が必ずしも詩の文学的価値が高いわけではない。知られざる詩人の詩による歌曲にもいくつかの名曲が含まれている。

- ・アゲタン Pierre Aguétant : 「我らが愛したところ」 *Où nous avons aimé* (デュラン社刊1918) .
- ・オディジエ Georges Audigier : 「大河」 *Le Fleuve* (デュラン社刊1906) .
- ・バルビエ夫人 M^{me} Marie Barbier : 「晴朗」 *La Sérénité* (デュラン社刊1896) .
- ・ボワイエ Georges Boyer : 「雄々しき愛」 *L'Amour viril* .
- ・ディステル Camille Distel : 「暁の星」 *L'Étoile du matin* (デュラン・エ・シェーネヴェルク社刊1880) .
- ・ドコワ Georges Docquois : 「赤き灰」歌とピアノの為の十篇の叙情詩 *Le Cendre rouge*⁽⁹⁾, dix poèmes lyriques pour chant et piano (1914作曲、デュラン社刊1915) .
- ・フルニエ Paul Fournier : 「アメリカに栄光あれ」 *Honneur à l'Amérique* (デュラン社刊1917) .
- ・アイダール=パシャ大公 S.A.Le Prince Haidar-Pacha : 「星」 *L'Étoile* (デュラン社刊1907) .
- ・レシエ Renée de Léché : 「蝶々」 *Papillons* (デュラン社刊1918) .
- ・ルコック Charles Lecoq : 「かのひと」 *Elle* (Sonnet) (デュラン社刊1907) .
- ・マオ A.Mahot : 「誇らしき美」 *Fièvre Beauté* (デュラン・エ・フィス社刊1893) .
- ・マンジョ L.Mangeot : 『十の歌曲』 *Dix Mélodies* (シューダンス社刊1866) の 1、2、9 曲目内訳→(1)「小夜曲」*Sérénade* (2)「メヌエット」*Menuet* (9) 「ほほえむ自然」 *Nature souriante* .
- ・マルタン Paul Martin : 「樅の木」 *Les Sapins* (『アルトの為の二つの歌曲』 *Deux Mélodies pour voix de contralto* (デュラン社刊1914) より) .
- ・パンマルシュ G.de Penmarch : 「花々の眠り」 *Le Sommeil des fleurs* (デュラン・エ・シェーネヴェルク社刊1889) .
- ・ペルピナ D.Francisco Perpina : 「愛の望み」 *Désir d'amour* .
- ・プレサ André Pressat : 「スール・アンヌよ」 *Sœur Anne!* (デュラン社刊1903) .
- ・ルニョ夫人 M^{me} Félix Regnault : 「忘れたもうな」 *Ne l'oubriez pas* (デュ

ラン社刊1919).

- ・ルノ Armand Renaud: 「ペルシャの歌」 *Mémoires persanes* Op. 16 (作曲 1870、デュラン・エ・シェーネヴェルク社刊1875)⁽¹⁰⁾.
- ・サン=シャフレ Edouard Saint-Chaffray: ロマンズ「汝よ」 *Toi!* (リショ社刊1896).
- ・シカール S.Sicard: 「葡萄の収穫」(民衆の賛歌) *Les Vendanges* (Hymne populaire) デュラン社刊1898).
- ・スチュアール Paul Stuart: 「春」 *Primavera* (作曲、アルジェにて、1893年 4月15日、デュラン・エ・フィス社刊1893).
- ・トランシャン Alfred Tranchant: [1] 「マドレーヌ」 *Madeleine* (デュラン・エ・フィス社刊1893) [2] 「もしもそうするなら」 *Si je l'osais* (デュラン社刊1896).

(9) 自作詩

[1] 「トスカナのカンツォネッタ」 *Canzonetta toscana* [2] 「海の鐘」 *Les Cloches de la mer* (デュラン・エ・フィス社刊1906) [3] 「夕べの鐘」 *Les Cloches du soir* (デュラン社刊1924) [4] 「東洋の欲望」 *Désir de l'Orient* [5] 「ギターとマンドリン」 *Guitares et mandolines* (デュラン・エ・シェーネヴェルク社刊1888) [6] 「ナイル河の日の出」 *Le Lever du soleil sur le Nil* (デュラン・エ・フィス社刊) [7] 「蜻蛉(とんぼ)」 *La Libellule* (デュラン・エ・フィス社刊1894) [8] 「主題変奏」 *Thème varié* (デュラン社刊1900) [9] 「ヴィーナス」 *Vénus* (テノールとバリトンの二重唱).

音楽家としての長い経歴の中で、中世から彼自身の同時代、さらに若い二十世紀の詩人に至るまで幅広く作品を求めて作曲した。多数のオペラを作曲しているので、台本作家の詩による歌曲も多い。また、すでに述べたように、サン=サーンスは自作の詩による歌曲もある。

知られざる詩人の中には台本作家やフォーレの『幻影』の場合のプリモン男爵夫人のようにサロンの詩人もいる可能性がある。知られざる詩人と作曲家たちの関係については今後の研究の課題である。また、詩人の名が明記されていない作品もあるが、それらはここでは除外した。

ところで、サン=サーンスはフォーレ等後輩にワグナーの音楽を紹介して、非常に刺激を与えたが、彼自身の歌曲は非常に洗練されているが、転調も少な

く、伝統的な旋律主義を超えた前衛的な歌曲は少ない。この点からもフォーレの新しい音楽が師にどれほどショックを与えたか想像できる。これについては拙著『ガブリエル・フォーレと詩人たち』の『よき歌』の項に詳しく述べた。

◇ビゼ Georges Bizet (1838-1875)

ビゼは天才的なピアニストとして世に出た。また、作曲家として1857年19歳でカンタータ『クロヴィスとクロチルド』*Clovis et Clotilde*でローマ賞を受賞した。しかし、当時音楽家たちはオペラを作曲することにより作曲家として認められる風潮があったので、オッフェンバックの劇場主催の懸賞オペレッタ受賞作『ミラクル博士』*Le Docteur Miracle* (1857)、作曲家としての集大成である最後のオペラ・コミック『カルメン』*Carmen* (1875)の他に、十曲以上のオペラ、オペレッタ、オペラ・コミックを作曲した。ピアノ曲は連弾曲の『子供の遊び』*Jeux d'enfants* (12曲-1871)以外、今日演奏される機会はほとんどない。声楽曲はオペラ、オペラ・コミック、歌曲、重唱曲、宗教曲などがある。ビゼは40曲以上の歌曲を残した。その内訳は『アルバムの子葉』*6 Feuilles d'album* (ユジエル社刊 Heugel 1866)、『歌曲20曲集』*Vingt Mélodies* (シューダンス社刊 Choudens 1873)、『歌曲16曲集』*16 Mélodies* (シューダンス社刊1886)にある計42曲であるが、死後出版の『歌曲16曲集』の多くの曲は未完成のオペラから借用した旋律が多い。

(1) 十六世紀の詩人

- ・ロンサール：「ソネ」*Sonnet*.

(2) 十七世紀・十八の詩人たち

- ・ルニャール Jean-Francois Regnard (1655-1709)：「牧歌」*Pastorale* (1868)

パリの豪商の家に生まれたが、早く父親を失い、母親の手で育てられる。1671年より数年に一度の割合でパリに戻るが、ヨーロッパ、近東、アフリカ、北歐、東歐を冒険旅行する。その体験談を小説『プロヴァンスの女』*La Provençale* や『旅行記』*Voyages* に記す。パリ定着後喜劇作家として、イタリア喜劇の脚本を書く。『幸運な男』*L'Homme à bonnes fortunes* (1690)、『サン＝ジェルマンの縁日』*La Foire de Saint-Germain* (1695)などがある。

- ・ミルヴォワ：[1]「愛の薔薇」*Rose d'amour* [2]「古歌」*Vieille Chanson* (1865).

この2曲はビゼの歌曲の中でも代表的なもので、現在もしばしば演奏されている。

(3) 前期ロマン派詩人

- ・ドラヴィーニュ：「祈るなかれ」あるいは「煉国の魂」*Vous ne priez pas ou L'Ame du purgatoire* (シューダンス社刊1873)。

(4) ロマン派詩人たち

- ・ユゴー： [1] 「アラブの宿の女主人の別れ」*Les Adieux de l'Hôtesse d'arabe* (作曲1866、刊行1867) [2] 「冬の後で」*Après l'hiver* (作曲、刊行1866) [3] 「狂人の歌」*La Chanson du fou* (作曲、登録1868) [4] 「てんとう虫」*La Coccinelle* (作曲、登録1868) [5] 「ギター」*Guitare* (作曲、刊行1866) [6] 「おお、わたしが眠るとき」*Oh! Quand je dors* (BN 資料室自筆原稿) [7] 「パトモスの聖ヨハネ」*Saint-Jean de Pathmos* (男声合唱-作曲1866) [8] 「誓い」*Vœu* (BN 資料室自筆原稿)。
- ・ラマルチヌ： [1] 「こおろぎ」*Le Grillon* 「静かな海」*Douce mer* (1866) [2] 「愛の歌」*Chant d'amour* (1872)。
- ・ミュッセ： [1] 『さようなら、シュゾン』*Adieu, Suzon* (1866) [2] 「花に寄せて」*A une fleur*。
- ・デボルド＝バルモール：「昔の調べにのせた子守歌」*Berceuse sur un vieil air* (1888)。

(5) 後期ロマン派詩人たち

- ・ゴーチエ：「きみなくて」*Abscence*。
- ・アルヴェール Alexis-Félix Arvers (1806-1850)：「わが人生には秘めたることが」*Ma vie a son secret*。

ロマン派の詩人として登場したが、大成せずに終わる。上記の歌曲の詩は詩集『失われた時』*Mes Heures perdues* にあり、ついに明かさぬ思いを詠ったアルヴェールのソネとして非常有名である。秘めたる愛を抱いた女性とはノディエの愛娘マリである。

(6) 高踏派の詩人

- ・マンデス： [1] 「愛し合って、夢見ましょう」*Aimons, rêvons* [2] 「捨てら

れた女」*L'Abandonnée* [3]「ガスコーニュの男」*Le Gascon*.

以上3曲は、ガレとプロ Blau 台本のオペラ『トゥレの王様の杯』*La Coupe du Roi de Thulé*[1868]の旋律にマンデスが歌詞をつけたと推定される。

(7) 劇作家たち

- ・ブイエ Louis Bouilhet(1821-1869)：「四月の歌」*Chanson d'avril*(作曲1866)。

ブイエはフロベールの学友で、文学上の相談相手であった。古代ローマの歌姫を詠った詩『メレニス』*Melænis* または *Maenis* (『パリ評論』*Revue de Paris* に発表。1851)、詩劇『ド・モンタルシ』*Madame de Montarcy* (1856)がある。遺稿『最後の歌』*Les Dernières Chansons* (1872)はフロベールにより出版される。

- ・パイユロン Edouard Pailleron(1834-1899)：「タランテラ」*Tarentelle* (1869)。

パイユロンはパリ生まれの劇作家。はじめ弁護士になるが、一幕韻文喜劇『居候』*La Parasite* を書いた後、ポンサール François Ponsard (1814-1867)に師事しながら、本格的な劇作家を志す。『愉快な世界』*Le Monde où l'on s'amuse* (1868)、『退屈な世界』*Le Monde où l'on s'ennuie* (1881)など風刺喜劇作家として当時もてはやされた。

(8) 台本作家たち

- ・バルビエ：『薔薇の歌』*La Chanson de la rose*.
- ・カレ：「セレナーデ」*Sérénade*(オペラ『真珠取り』*Les Pêcheurs de perles* [1863]より)。
- ・クルモン Courmont：「恋人の夢」*Rêve de la bien aimée*.
- ・フェリエ Paul Ferrier：[1]「疑い」*Le Doute*(シューダンス社刊1880、交響曲『ローマ』*Rome*[1860-71]より) [2]「お話」*Conte* [3]「夜明けの恋歌」*Aubade*.
- ・ガレ：[1]「恋を恋する」*J'aime l'amour*(オペラ・コミック『ジャミレ』*Djamileh*[1871]より)、[2]「忘れまい」*N'oublions pas*(オペラ『トゥレの王様の杯』*La Coupe du roi de Thulé*の「ヨリックのアリア」*Air de Yorik*より) [3]「人魚」*La Sirène*(オペラ『トゥレの王様の杯』の「クラリベルのアリア」*Air de Claribel*より) [4]「夜」*La Nuit*(オペラ『トゥレの王

様の杯』の「人魚たちの合唱」*Chœur des sirènes*より)。

- ・ジル Philippe Gille：[1]「パステル」*Pastel*、[2]「旅」*Voyage* [3]「あなたが愛するなら」*Si vous aimez*。
- ・ウダン E.Oudin：「朝」*Le Matin*(付随音楽『アルルの女』*L'Arlésienne*。ドレー原作[1872]より)。
- ・ヴェルノワ・ド・サン＝ジョルジュ *Vernoy de Saint-Georges*：[1]「わたしは何も言わない」*Je n'en dis rien*(シューダンス社刊1873。オペラ『美しいペルトの娘』(*La Jolie Fille de Perth*[作曲1866]) [2]「何故泣くの？」*Pourquoi pleurer?* [3]「一体誰がもっと君を愛するだろう？」*Qui donc t'aimera mieux*([2][3]はオペラ『ノア』*Noé*[シューダンス社刊1885]より)。

(9) 知られざる詩人たち

- ・ドラートル Louis Delâtre：「スペインのセレナーデ」(原題「心を広げて」)*Sérénade espagnole*(*Ouvre ton cœur*)(シューダンス社刊1873→合唱付き交響詩『ヴァスコ・ダ・ガマ』*Ode symphonique, Vasco da Gama*より)。
- ・ロラン Olivier Rolland：[1]「薔薇と蜜蜂」*La Rose et l'abeille* [2]「かわいいマルグリット」*Petite Marguerite*(以上2曲、シューダンス社刊1854)。

ビゼの生前、シューダンス社は『二十歌曲集』(1873)を出版したが、非常に評判がよかったので、オペラを編曲して『十六歌曲集』(1886)を出版した。つまり、オペラのアリアの旋律に新しい詩をつけて歌曲として出版したわけである。このようなことは十八世紀以来頻繁に行われていた。たとえばドゥゼード Alexandre Dezède または Desaiides(?1740-1792)の「お母さまに申し上げたい」*A vous dirais-je, maman*に「きらきら星」あるいは「ABCの歌」となって、我々が親しんでいる例がある。これを「パロディ」と呼んでいた。

ビゼはオペラの作曲家として世に出たためか、歌曲もオペラのアリアを思わせる曲がかなりある。たとえば「アラブの宿の女主人の別れ」や「きみなくて」のようにドラマチックな曲があるが、一方、「四月の歌」のように叙情的な曲もある。

選んだ詩人はロンサール始まり、高踏派の詩人に至っているが、オペラの作曲家として台本作家の詩を使った曲が多い。

| |
|-----------|
| 同時代の作曲家たち |
|-----------|

◇マスネ Jules Emile Frederic Massenet (1842-1912)

12人兄弟の末子で、家計を助ける為にピアノ教師をしていた母親に音楽の手ほどきを受ける。51年にパリ音楽院へ入学し、作曲はトマ Ambroise Thomas (1811-1896)に師事する。1863年にカンタータ『ダヴィッド・リッツィオ』*David Rizzio*でローマ賞を受賞。三年間のローマ、ヴィラ・メディチに留学中リストに出会う。66年にはリストの依頼でサント＝マリ＝嬢(後のマスネ夫人)にピアノを教える。留学中イタリア、ドイツ、ハンガリーへ旅行し、ヴェネチアでは詩人のミュッセに出会う。帰国後、トマの影響を受けた最初のオペラ『大叔母さん』*La Grand-Tante*がオペラ・コミック座で上演される。また、トマに連れられて行ったサロンでシルヴェストルに出会い、『四月の詩』*Poème d'avril*が作曲されるが、世間の注目を浴びたのは1873年のオラトリオ『マグダラのマリア』*Marie-Magdeleine* (1873)である。1877年『ラオールの王様』*Le Roi de Lahore*がオペラ座で上演され、その名声は決定的なものになる。翌年36歳でパリ音楽院の作曲科の教授になる。18年間の在職中、ショソン、アーン、シャルパンチエ Gustave Charpentier (1860-1956)、ブリュノー Alfred Bruneau (1857-1934)、ピエルネ Gabriel Pierre (1863-1919)、ルルー Xavier Leroux (1863-1919) などすぐれた作曲家を育てた。

ピアノ曲、チェロ曲、管弦楽、宗教音楽、歌劇、付随音楽、歌曲など膨大な数の作品がある。1881年に管弦楽組曲『アルザスの風景』*Scènes alsaciennes*を最後に、オペラと歌曲の作曲に専念する。『エロディアード』*Hérodiade* (1881)、『マノン』*Manon* (1884)、『ヴェルテル』*Werther* (1892)、『ドン・キホーテ』*Don Quichotte* (1910)等、その数は多い。ほかにペロー原作の『サンドリヨン』*Cendrillon* (1899)、アナトール・フランス原作の『タイス』*Thaïs* (1894)、『ノートル＝ダムの軽業師』*Le Jongleur de Notre-Dame* (1902)、ドーデ原作の『サフォ』*Sapho* (1897)など文学作品を基にしたオペラが多数ある。

一方、260曲ほどの歌曲を作曲し、その普及につとめた。内訳は『20曲集』8巻、連作歌曲10巻以上である。ここに掲げたのはその一部に過ぎない。

ワグナーの影響を受け、ライト・モチーフや半音階を用いているが、わかり易く、自然で印象的な魅力を醸し出している。ただし、旋律美が目立ち、内面性が欠けているように思われるのは否めない。

(1) 十七・十八世紀の詩人

- ・プレヴォ Antoine-Francois Prevost d'Exiles, l'abbé(1697-1763)：「夜明けの恋歌」*Aubade*(1877)。

マスネはプレヴォの原作から、メイヤックとジルの台本で1884年のオペラ・コミック『マノン』*Manon* を作曲する。

- ・フロリアン：連作歌曲『田園詩』*Poème pastoral*(1872)全6曲中1、2、4、6曲目。その他はシルヴェストル→(1)「羊飼いの娘たちの合唱」*Chœur des bergères* (2)「ミュゼット」*Musette* (3)「風景」*Paysage* (6)「羊飼いの別れの歌」*Adieux du berger*。

(2) ロマン派詩人たち

- ・ユゴー：[1]「ギター」*Guitare*(1886) [2]「それは愛」*C'est l'amour*(1908) [3]「落日」*Soleil couchant*(1912) [4]「夜」*La Nuit*。
- ・ミュッセ：[1]「ヴェネチアの思い出」*Souvenir de Venise*(1865) [2]「ホラチウスとリディア」*Horace et Lydie*(1865)。

(3) 高踏派詩人たち

- ・シルヴェストル：[1]連作歌曲『四月の詩』*Poème d'avril*(1866-68)全4曲内訳→(1)「前奏曲」*Prélude* (2)「朝のソネ」*Sonnet Matinal* (3)「大きな百合の花が」*Voici que les grands lys* (4)「笑うの？笑わないの？」*Riez-vous? Ne riez-vous pas?* (5)「明日になれば愛するでしょう」*Vous aimez demain* (6)「時は何と短いのでしょうか」*Que l'heure est donc brève* (7)「泉の上に」*Sur la source* (8)「別れ」*Adieu*。[2]連作歌曲『思い出の詩』*Poème du souvenir*(1868)全6曲内訳→(1)「逝った女(ひと)」*A la trépassée* (2)「夕べの空気が運び去り」*L'air du soir emportait* (3)「香りの息吹」*Un souffle de parfum* (4)「絹糸の満ちる空気の中で」*Dans l'air plein de fils de soie* (5)「希望に向かって」*Pour qu'à l'espérance* (6)「墓碑銘」*Épitaphe*。[3]連作歌曲『田園詩』*Poème pastoral*(1872)全6曲中3、5曲目内訳→(3)「あかつき」*L'Aurore* (5)「たそがれ」*Crépuscule*。[4]連作歌曲『冬の詩』*Poème d'hiver*(1882)全5曲内訳→(1)「菊の花の咲くころに」*C'est au temps de la chrysanthème* (2)「わが心はあなたへの想いに溢れて」*Mon cœur est plein de toi* (3)「降誕祭」*Noël* (4)「君はそう言った：『あなたを愛せない』と。」*Tu l'as bien dit ; je ne sais pas t'*

aimer (5)「ああ、わたしはそうありたい」*Ah! du moins je veux être.* [5]
「枝々の下で」*Sous les branches* (1868) [6]「マドリガル」*Madrigal*
(1866-1872頃)、[7]「異教のソネット」*Sonnet païen* (1866-1872頃) [8]「雨
が降っていた」*Il pleuvait* (1871) [9]「秋の想い」*Pensée d'automne* (1888)
[10]「侯爵夫人」*Marquise* (1888) [11]「ある別れ」*Un Adieu.*

- ・コペ：『ザネットのセレナーデ』*Sérénade de Zanette* (1869) [2]「通行人
のセレナーデ」*Sérénade du Passant.*
- ・フランス Anatole France (1844-1924)：「暗い魂」*Ames obscures* (1912).
- ・エカール Jean Aicard：「乳母の歌」*Chant de nourrice* (1905).
- ・マンデス：(オペラ)「アリアヌ」*Ariane.*

(4) 象徴派詩人

- ・ヴェルレーヌ Paul Verlaine (1844-1996)：「夢見よう、今は妙なる時」
Rêvons, c'est l'heure (1871).

(5) 外国の詩人

- ・テニスン Alfred, lord Tennyson：「モード、庭に入ってきたまえ」*Come into
the garden, Maud* (1880).

(6) モーパッサン Guy de Maupassant (1850-1893)：「幸せを求めて」*Je cours après le bonheur* (1888頃)

(7) 台本作家たち

- ・ポルデーズ：「結婚の日」*Jour de nocés* [2]「知っているかい？」*Le sais-tu?* (1880).
- ・カレ：[1]「プロヴァンスの歌」*Chant Provençal.*
- ・ガレ：[1]「悲歌」*Élégie* [2]「コロンビーヌへ(アルルカンのセレナーデ)」
A Colombine (Sérénade d'Arlequin) [3]「マグダラの女たち」*Les Femmes
de Magdala* [4]「スペインの夜」*Nuit d'Espagne* [5]「カプリの歌」*Chanson
de Capri.*
- ・ジル：「去年の春」*Printemps dernier* (1884).
- ・コラン Paul Collin：[1]連作歌曲『十月の詩』*Poème d'octobre* (1876) 全6
曲内訳→(1)「前奏曲」*Prélude* (2)「秋」*Automne* (3)「マロニエ」*Les*

Marronniers (4)「美しき寒がりや」*Belles Frileuses* (あるいは「十月の薔薇」*Roses d'octobre*) (5)「構うものか」*Qu'importe* (6)「鳥のように」*Pareils à des oiseaux*.

フォーレの『ヴィーナスの誕生』*La Naissance de Vénus*, Op.29(1882)の作詞者である。

- ・シュードグンス：「失われた小径」*Le Sentier perdu*(1877)。
- ・クローズ J.L.Croze：「嘆きたまえ」*A deux pleurer!*。

(8) 知られざる詩人たち

マスネの歌曲の一部を取り上げるとはいえ、非常に多いので煩雑ではあるが、以下に記す。

- ・アデル Ader：ソプラノとアルト二重唱「ひとりぼっちの時」*L'Heure solitaire*(1908)。
- ・アレクサンドル *Andre Alexandre*：「祝福された恋」*Amours bénis*。
- ・オトラン *Joseph Autran*(1813-1877)：「空想の鳥ハルキュオネ」*Les Alcyons* (1881頃)。

マルセイユの詩人。ラマルチーヌに憧れ、詩集『海』*La Mer* (1835)、『海の詩』*Les Poèmes de la mer* (1852)で海を題材にした詩的諧調の世界を描く。のちに農村をテーマに描写的な表現で『農夫と兵士たち』*Laboureurs et Soldats* (1854)を制作。一方、ボンサール風の演劇『アイスキュロスの娘』*La Fille d'Eschyle* (1848)を執筆。1868にアカデミー・フランセーズ入り。

- ・バルビエ *Marie Barbier*：「天使と子供」*L'Ange et l'Enfant* (1899)。
- ・バザン *Noël Bazan*：「手」*Les Mains*。
- ・ベシエ *Fernand Beissier*：「可愛いミレイユ」*Petite Mireille*。
- ・ベルトロワ *Bertheroy*：「薔薇の咲く小径の中で」*Dans le sentier parmi les roses* (1891)。
- ・ブランシュコット夫人 *Mme Blanchecotte*：「秋のセレナーデ」*Sérénade d'automne*。
- ・ボワイエ *Georges Boyer*：[1]「可愛いひと、もし君が望むなら」*Si tu veux, Mignonne* (1876) [2]「子供たち」*Les Enfants* (1881) [3]「幼きイエス」*Le Petit Jesus* (1899) [4]連作歌曲『清らかな三つの詩』*Trois Poèmes chastes* (1903)→(1)「可哀そうな奴」*Le Pauv' petit*。

十九世紀から二十世紀にかけてボワイエという詩人・作家および民衆音楽の

作詞家、歌手などには、シャンソンの作詞家、歌手のリュシアン・ボワイエ Lucien Boyer (1876-1942) がいる。1898年デビューし、ヌマ・プレスと演奏旅行の世界ツアーをする。「モンマルトルが見られよう」*Tu verra Montmartre*、『勝利のマドロン』*La Madelon de la victoire*のほか、ダミアやミスタンゲットの作詞家。しかし、ジョルジュ・ボワイエに関しては不詳。

- ビュシオ G. Buchillot : [1] 「おお！もし花に目があれば」 *Oh! si les fleurs avaient des yeux* (クロワセとカン F. de Croisset et H. Cain 台本の『シェリュバン』より d'après *Chérubin* 1903) [2] 「閉じた目」 *Les Yeux clos* (1905).
- ビュッシーヌ Romain Bussine Jeune : 『即興詩人』*L'Improvisateur* (d'après Zaffirà 仏訳詩1864)。
フォーレの「夢の後に」の詩人ではない。息子であろうか？
- シャバレイレ Paul de Chabaleyret : [1] 「アントワネットのために」 *Pour Antoinette* [2] 「通り過ぎるあなた」 *Vous qui passez*.
- シャフォット Chaffotte : 「春が大地を訪れる」 *Le Printemps visite la terre* (1901).
- シヤントピー J. Chantepie : 「おやすみなさい、恋人よ」 *Dors, ami*.
- シュケ Chouquet : 連作歌曲『愛の歌』*Chants intimes* (1869) → (1) 「恋の告白」 *Déclaration* (2) 「愛しき人へ」 *À Mignonne* (3) 「子守歌」 *Berceuse*.
- ドゥムト Paul Demouth : [1] 「こころ」 *Les Âmes* [2] 「巣」 *Le Nid*.
- ディステル Distel : 『三つの歌曲』*Trois Mélodies* Op.2 (1868) 全4曲内訳 → (1) 「松林」 *Le Bois de pins* (2) 「おやすみなさい」 *Bonne nuit* (3) 「果樹園」 *Le Verger* [4] 三重唱「夏の朝」 *Matinée d'été* (1868).
- ドルツァル Dortzal : [1] 「羽ばたき」 *Battement d'ailes* (1909-1912) [2] 「昔のように」 *Comme autrefois* (1909-1912) [3] 「夜曲」 *Nocturne* (1909-1912) [3] 「香り」 *Parfums*.
- デュエール Duer (d'après) : 「もてる男へ」 *Au très aimé* (1900).
- フォール Jean-Baptiste Faure (1830-1914) : 「蟬の死」 *La Mort de la cigale* (1911).

バリトン歌手。オペラ=コミック座を経て、オペラ座へ入る。『アフリカの女』、『ハムレット』、『ドン・カルロス』などに出演。当時のもっとも人気バリトン歌手の一人。パリ音楽院の声楽教授(1857-60)で教育の改革に熱心であった。著書『声と歌』がある。

- ・フェラン François Ferrand：「四月がきた」 *Avril est là*.
- ・ガスキ Gasquy：女声の為の組曲『花の詩』 *Poème des fleurs* (アリエヴォによる d'après Allievo 1907) 全4曲内訳→(1)「前奏曲」 *Prélude* (2)「花の賛歌」 *Hymne des fleurs* (3)「小枝の踊り」 *Danse des rameaux* (4)「五月の歌」 *Chanson de mai*.
- ・ガシエ Gassier：「目覚め」 *Éveil* (1906).
- ・ジルベール Gilbert：「スタンス」 *Stances*

該当するジルベールは二人いる。ガブリエル Gabriel (1620頃-1680頃)はローアン公爵夫人の秘書を経て、スウェーデン女王により、フランス駐在外交官に任命される。マザラン、フーケ、財務官エルヴァールに保護される。今日では忘れられたが、当時は冗長な文体で知られた戯作者で、40年頃からあらゆるジャンルの作品を発表する。処女作『マルグリット・ド・フランス』 *Marguerite de France* (1640)で大成功をおさめた。47年に『セミラミス』 *Sémiramis* (1647)を最後に十年間劇作を中断したのち、田園劇『ダイアナとエンデュミオンの恋』 *Les Amours de Diane et d'Endymion* (1657)で執筆を再開する。詩集『拾遺詩集』 *Recueil de poésies diverses* (1661)がある。

もう一人のニコラ・ジョゼフ・ロラン Nicolas-Joseph-Laurant (1750-1780)はロレーヌ地方の農民の出身。パリへ出るのが、百科全書派の文人に冷遇された。啓蒙思想や無心論者を攻撃した風刺詩『十八世紀』 *Le XVIII^{ème} Siècle* (1775)と『わが弁明』 *Mon Apologie* (1778)で世に出る。カトリック教会と宮廷に近づき、それぞれから年金を受ける。さらに「メルキユール・ド・フランス」誌からも年金を受ける。落馬が原因で脳に障害を受け、精神状態に異常が起きる。死の数日前、意識が鮮明であったときに書かれた『詩編を模したオード』 *Ode imitée de plusieurs psaumes* は傑作とされている。ヴィニーの小説『ステロ』 *Stello* のモデルになっているが、決して貧困の内に死んで行く詩人ではない。

- ・ゴント=ピロン男爵 Aune Armand Elie, vicomte de Gontaut-Biron (1817-1890)：「ウェルテルからシャルロットへの最後の手紙」 *La Dernière Lettre de Werther à Charlotte* (1909-1912).

1871年バス=ピレネ選出の国会議員を経て、普仏戦争敗戦後のベルリン駐在大使(71-78年)になる。この間、仏独外交復活に尽力する。以上、政治家としての経歴のみ調べることが出来た。しかし、マスネの曲になった詩はこの人物の作品である可能性は非常に少ない。可能性としてはベルリン滞在が長かったこと、ブローBlau、ミリエ Millier、アルトマン Hartmann の台本によるオペラ

『ウェルテル』Wertherの初演が1892年ウィーンであることから、外交官としての影の働きがあったことも考えられる。その思い出に男爵の、あるいは男爵の親族の詩を使った可能性はある。しかし、以上、推測に過ぎない。この辺の事情は今後の研究に委ねる。

- ・グラン Grain：「愛の妖精」*Feux follets d'amour* (1909-1912).
- ・グラヴォレ Grivollet：「わたしの愛しい母は泣いた」*Ma petite mère a pleuré* (1902)
- ・グリユマール Edouard Griemard：「わたしが歌いたいのは幼き子ら」*Ce sont les petits que je veux chanter.*
- ・アルモン Jacques d'Halmont：「四月は恋をしている」*Avril est amoureux* (1900).
- ・イルシュ Hirsch：「夢の彼方に」*Au delà du rêve* (1903).
- ・ジャネ Jannet：「黒檀の小函」*Le Coffret d'ébène.*
- ・ジャケ Jaquet：「体験した時間」*Heure vecue* (1912).
- ・ルベ Lebey：連作歌曲『薄紫色の歌』*Quelques chansons mauves* (1902) → (1) 「君の愛と同時に」*En même temps que ton amour* (2) 「二人が出会ったとき」*Quand nous nous sommes vus* (3) 「これほどの幸せは決して望めない」*Jamais un tel bonheur.*
- ・ルフェヴル Louis Lefebvre：「最後の歌」*La Dernière Chanson.*
- ・ルグラン Legrand：ソプラノ、アルト、テノール、バス四重唱『アマラントの森の歌』*Chansons des bois d'Amaranthe* (レッドヴィッツによる d'après Redwitz 1900) → (1) 三重唱「おお、素晴らしき春」*O bon printemps* (2) 女声二重唱「森の小鳥たち」*Oiseaux des bois* (3) 四重唱「親しき花々」*Chères fleurs* (4) 三重唱「おお、流れよ」*O ruisseau* (5) 四重唱「歌いたまえ」*Chantez!*
- ・ル・モワヌ Le Moyne：連作歌曲『清らかな三つの詩』*Trois Poèmes chastes* (1903) 全3曲の内 → (2) 「ベツレヘムの方へ」*Vers Bethléem.*

ル・モワヌ Pierre Le Moyne (1602-1671) とルモワヌ Camille-André Lemoyne (1822-1907) がいる。前者はイエズス会の僧で、クレルモン学院 Collège de Clermont の神学の教授。『道徳的な絵画』*Peintures morales* (1640) や『容易なる献身』*La Dévotion aisée* (1652) などの著書の他、キリスト教的叙事詩『聖ルイ王』*Saint-Louis* (1653) がある。

後者は高踏派の詩人。詩集『海の星』*Stella maris* (1860)、『昔の薔薇』*Les Roses*

d'antan (1865-69)、『魅了する女たち』*Les Charmeuses* (1867)、『海の風景と牧場の花』*Paysages de mer et fleurs de pré* (1876、アカデミー賞受賞作品)、『夕べの花』*Fleurs du soir* (1893) など、自然の中の人間を描いた作品を書いた。さらに小説『ノルマンディの田園詩』*Un idylle normande* (1874) がある。

綴り字から前者が優位であるが、後者である可能性が多い。しかし、これも推測の域を出ない。

- ・ルヴァンクール Roch de Louvencourt : 「雲」*Les Nuages* (1909-1912) .
- ・リュダーナ Ludana : [1] 「もしもわたしに仰りたいなら」*Si vous vouliez bien me le dire* (1907) [2] バリトンとテノール二重唱 「時と愛」*Le Temps et l'Amour* (1907) .
- ・メグロ Henri Maigrot : [1] 「かのひとのために歌う歌」*Chanson pour elle* .
- ・マンシーリャ Garcia Mansilla : 「敢えてするなら」*Si tu l'oses!* (1897)
- ・マケ Auguste Maquet, あるいは Augustus Mac-Keat, あるいは Mac-Queat (1813-1888) : [1] 「彼と彼女」*Lui et elle* (1891) [2] 二重唱と女声合唱 「星々に」*Aux étoiles* (1891) .

ロマン派詩人で、『エルナニ』事件の時ユゴーの支持者。ネルヴァル、ゲーテなど交友を保ち、やがて、大デュマを知る。『バチルド』*Bathilde* (1839) で成功するが、大デュマの代作者となり、デュマのほとんどの大きな作品の代作をする。のち、デュマを離れ、彼自身の小説を発表。『美しいガブリエル』*La Belle Gabrielle* (1853-54)、『ラヴェルニ伯爵』*Le Comte de Lavernie* (1855)、『水浴者の家』*La Maison du baigneur* (1856) などいずれも成功した。

- ・モレール Maurer : 「旅先で」*En voyage* (1909-1912) .
- ・ジャヌ・マンデス Jane Mendes : 「手紙」*La Lettre* (1907) .
- ・ノエル Marie Rouget Noël (1883-1967) : 「ピュイジョリのガヴョット」*La Gavotte de Puyjoli* (1909) .

カトリックの女流詩人。平易な日常語で詩作した。『歌と時間』*Les Chansons et les heures* (1922)、『よろこびのロザリア』*Le Rosaire des joies* (1930)、『秋の歌と賛歌』*Chants et psaumes d'automne* (1947)、『晩秋の歌』*Chants d'arrière-saison* (1961)。そのほか、『赤い薔薇』*La Rose rouge* (1960) などの散文作品もある。

- ・ノルマン Jacques Normand : [1] 「初めてのダンス」*Première Danse* [2] 「古い手紙」*Vielles Lettres* [3] 「ピッチェネット」*Pitchounette* (1897) [4] バリトンとソプラノ二重唱 「花々」*Les Fleurs* (1894) .

- ・ペリシエ Leon G.Péllisier : [1] 「子供のまなざし」 *Regard d'enfant*.
- ・ペイール Peyre : 「感傷的な夢想」 *Rêverie sentimentale* (1910).
- ・ポワルソン Poirson : 「五月の薔薇」 *Rose de Mai* (1909-1912).
- ・プラデル Pradel : 「ソネット」 *Sonnet* (1869).
- ・ブランセ Princet : 「天国の鳥」 *L'Oiseau du paradis*.
- ・ロビケ Robiquet : 連作歌曲『愛の詩』 *Poème d'amour* (1878-1880、二重唱)
全6曲内訳→(1) 「雉鳩のせいにするわけではないけれど」 *Je me suis plaint aux tourterelles* (2) 「恐らく夜はとても美しかったですよ」 *La Nuit sans doute était trop belle* (3) 「青い目を開けなさい」 *Ouvre tes yeux bleus* (4) 「彼女がわたしの生命を奪ったので」 *Puisqu'elle a pris ma vie* (5) 「何故、泣くの」 *Pourquoi pleures-tu* (6) 「おお、やめないで」 *Oh! ne finis jamais*.
- ・ルー Joseph Roux (1834-1905) : 「人々は言う！」 *On dit!* (1901).
文学をミストラルに師事し、リモージュ地方の方言で詩作した村の司祭。『リモージュの歌』 *Chanson limousina* (1889) はリモージュ語文学の復活となる。
- ・リュエル Ruelle : 「薔薇のいのち」 *La Vie d'une rose*.
- ・サルマント Sarmento : 「もうこれ以上」 *Jamais plus* (1912).
- ・シモーニ H.Ernest Simoni : 「陶酔の杯」 *Coupe d'ivresse*.
- ・ソルヴェ Solvay : 「彼女は去った」 *Elle s'en est allée* (1895).
- ・ストップ Stop : [1] 「恋する女」 *Amoureuse* (1898) [2] 「扇」 *L'Eventail* (1891).
- ・タラント公爵 Duc de Tarente : 「恋する女は狂った女」 *Les amoureuses sont des folles* (1902).
- ・トゥレ Teulet : 「失望した歌」 *Chanson désespérée* (1905).
- ・ヴァカレスコ夫人 Mme Édouard Vacaresco : 「九月」 *Septembre*.
- ・ヴァランドレ Marie de Valandré : 「初めての銀色の糸」 *Premiers fils d'argent*.
- ・ヴァノール Vanor : 『夕べの詩』 「三つのオルフェの注解」 *Poème d'un soir (Trois Gloses orphique)* 全3曲内訳→(1) 「交誦」 *Antienne* (2) 「フルラミー」 *Fleuramye* (3) 「生まれ変わる死者」 *Defunctanascuntur*.
- ・ヴァレンヌ Varenne : 「対話」 *Dialogue* (1909-1912).
- ・ヴィルール Villeurs : 連作歌曲『清らかな三つの詩』 *Trois Poèmes chastes* (1903) 全3曲の内→(3) 「口づけの伝説」 *La Légende du baiser*.
- ・ヴァントゥリ-Vingtrie : 「鐘が伝えること」 *Ce que disent les cloches*

(1900).

(9) 作詞者不詳の曲

「朝」 *Le Matin* (vol.1).

「憂鬱」 *Mélancolie* (1909-1912).

「詩人と亡霊」 *Le Poète et le Fantôme* (1891).

「ミティスの詩」 *Poésie de Mytis* (1902).

圧倒的に知られざる詩人の詩による曲が多い。美しい声で歌うこれらの旋律美溢れるロマンスを聴き、心楽しむことができるが、芸術的に深淵なるものを求めることは困難である。やはり、詩の完成度が音楽の芸術性を高めるのであろうか？ シャブリエやフォーレとは求める音楽の方向が異なることを感じざるを得ない。

◇シャブリエ Emmanuel Chabrier (1841-1894)

早くからピアノと作曲の才能に恵まれていた。個人教授で音楽を学び、音楽院に入らず、内務省の役人になる。デュパルク、ショソン、フォーレ、メサジェ、ダンディ等音楽家たち、マネ、ヴェルレーヌなど画家や詩人たちと親交を結び、彼らの新しい芸術運動に刺激されて作曲する。喜歌劇『星』*L'Étoile* (1877)と『教育不足』*Une Éducation manquée* (1879)でデビューする。1880年ミュンヘンで見た『トリスタン』に仰天し、内務省を辞めて作曲に専念する。1880年のスペイン旅行の所産である狂詩曲『エスパーニャ』*España* (1883)をラムルー管弦楽団の初演し、成功した。1886年ブリュッセルのモネ座で初演の2幕オペラ『グヴェンドリーヌ』*Gwendoline*、87年パリ、オペラ・コミック初演の3幕オペラ『いやいやながらの王様』*Le Roi malgré lui*によりその名は確立する。晩年健康がすぐれない中で、『ブリゼイス』*Briséis* (カチュール・マンデスとミカエルの台本、1888-91)を作曲したが、未完の作品となった。生涯にわたり、明るく、滑稽味をおび、人間性に溢れる作品を書いた。24の歌曲を作曲したが、生前に刊行されたのはその内の8曲であった。

(1) ロマン派詩人たち

- ・ユゴー： [1] 『ジャン王の群の行進』 *Le Pas d'armes du roi Jean* (1866) [2] 「無礼な督促」 *Sommaton irrespectueuse* (1881) [3] 「リュイ・プラス」 (聞

いてどうなる) *Ruy Blas* (*A quoi bon entendre* 1863頃)。

- ・ミュッセ：「シュゾンへの別れの歌」 *Adieux à Suzon*.

(2) 後期ロマン派詩人

- ・ラプラド Victor Laprade (1812-1883)：[1]「子供」 *L'Enfant* (1861) [2]「小鳥たちの歌」 *Chanson d'oiseaux* [3]「マリエットの歌」 *Couplets de Mariette*.

ラプラドはリヨンで法律を学び、弁護士となる。ラマルチーヌの愛弟子で、ラマルチーヌ風(『マグダラのマリアの香油』 *La Parfum de la Madeleine* 1829)、キリスト教的『イエスの怒り』 (*La Colère de Jésus* 1840)、プラトン風(『プシュケ』 *Psyché* 1841)、田園風叙事詩(『ペルネット』 *Pernette* 1868)などがある。

- (3)・ボードレール：「旅への誘い」 *Invitation au voyage* (1870).

(4) 高踏派詩人たち

- ・バンヴィル：「歌(リート)」 *Lied* (1861).
- ・シルヴェストル：「愛のクレド」 *Credo d'Amour* (1883).
- ・マンデス：[1]「ジャンヌに捧げる歌」 *Chanson pour Jeanne* (1886) [2]「歌(リート)」 *Lied* (1886頃).

(5) 象徴派詩人

- ・ミカエル Ephraim Mikhael (1866-1890)：「幸福の島」 *L'Ile heureuse* (1890).
ミカエルはマンデスと協力して『ブリゼイス』 *Briséis* (1889)を書いた。シャブリエが作曲する筈であったが、作曲者の死去で未完となった。

(6) 世紀末の詩人

- ・ロリナ Maurice Rollinat (1846-1903)：「君の青い目」 *Tes yeux bleus* (1883)
詩人、音楽家。ジョルジュ・サンド、ポー、ボードレールの影響を受け、カフェ「シャ・ノワール」などで詩を発表。暗い異常な精神状態を詠った『神経病』 *Névroses* (1883)で世に出た。彼自身神経病を病み、晩年重症に陥ったが、詩作と作曲を続け、詩集『深淵』 *L'Abîme* (1886)、『自然』 *La Nature* (1892)、『幽霊』 *Les Apparitions* (1896)、『風景と農民たち』 *Paysages et Paysans* (1899)

や作曲集を発表した。ボードレールの詩に作曲したものがいくつかある。

(7) 劇作家たち

- ・ロスタン Edmond Rostand(1868-1918)： [1]「歌に寄せて」 *A la musique*
 [2]「すべての花」 *Toutes les Fleurs*(1890) [3]「薔薇色をした豚の牧歌」
 Pastorale des Cochons roses [4]「太った七面鳥のバラード」 *Ballade des*
 gros dindons(1889) [5]「音楽に捧げるオード」 *Ode à la musique*(1890).
- ・ジェラルール Rosemonde Gérard： [1]「蟬」 *Les Cigales*(1889) [2]「小さなあひるたちのヴィラネル」 *Villanelle des petits canards*(1889).
ジェラルールはE.ロスタン夫人で息子のジャン・ロスタンと合作の戯曲もある。

(8) 台本作家たち

- ・ナジャックとビュラニ E.de Najac et P.Burani： [1]「雲雀の歌」 *Chanson de l'Alouette* [2]「ジプシーの歌」 *Chanson Tzigane*(2曲とも『いやいやながらの王様』 *Roi malgré lui*(1887).
- ・ルテリエとヴァンロー Leterrier et Vanloo：「星のロマンス」 *Romance de l'Etoile*.

(9) 知られざる詩人たち

- ・ラルノディ La Renaudie(?-1560)：「暗い小径」 *Le Sentier sombre*(1861).
ラルースの『百科辞典』に載っているラルノディはフランス南西部ペリゴールの貴族である。若い王フランソワ二世の宮廷で権力を欲しいままにしているギーズ公とその一派の影響力を減じようとコンデ公と共に、ラルノディは新教徒を率いてアンボワーズに襲撃をかける策略を練ったが、秘密が漏れて失敗に終わった「アンボワーズの陰謀」の主導者である。しかし、「暗い小径」の詩人と同一人物というのはほとんど不可能であると思う。
- ・シャティヨン Châtilon： [1]「セレナーデ」 *Sérénade* [2]「ああ、小さな悪魔！」 *Ah! Petit Démon*(以上2曲1861).
- ・ラバルル Théodore Labarre：「陶醉」 *Ivresses*(1869).
ハーブ奏者、作曲家で、オペラ・コミックの指揮者、パリ音楽院ハーブ教授。多数のオペラ、オペラ・コミックなどの上演を手がけた。彼自身ロマンスを作曲し、ハーブの教則本を書いた。

(10) 作詞者不詳の曲

- [1] 「ガリアの輪舞」 *Ronde gauloise* (1861) [2] 「フランスの最も美しい歌」
Les plus jolies chansons du Pays de France (1888).

(11) シャブリエの自作詩

- [1] 『オペラ・コミック座の案内嬢とボン・マルシェ百貨店の店員の二重唱』
Duo de l'ouvreuse de l'Opéra-Comique et de l'employé du Bon Marché.

ピアノ曲に『十の絵画風の小曲集』 *Dix Pièces pittoresques* (1881) におけるように絵筆をピアノに、色彩を音符にして、音による絵画を描いた作曲家である。その動きの生き生きした様子はラヴェルの場合も同様であるが、絵画というより映画などの映像を見る思いがする。

早世のため、作品の数は少ないが、ユゴーから世紀末詩人まで、それぞれの時代で代表的な詩人の作品に作曲している。なお、台本作家や知られざる詩人たちの詩では「星のロマンス」以外演奏されることは少ないように思われる。

もっともシャブリエらしい曲はロスタンやジェラルルの詩による歌曲であろう。また、これらはもっとも頻繁に演奏される代表作である。

なお、上記の通り、シャブリエは非常に楽しい自作詩の二重唱を作曲している。

◇デュパルク Henri Duparc (1848-1933)

コレージュ・デ・ジェスイット・ド・ヴォジラル Collège des Jésuites de Vaugirard に在学中からフランクにピアノを学び、音楽の美しさを知る。コレージュを卒業後もフランクのもとで作曲と理論を学ぶ。両親の希望で、大学で法律の勉強をしていたが、これには少しも興味を抱くことができなかつたようである。20歳前に、『舞い飛ぶ木の葉』 *Feuilles Volantes* など数曲のピアノ曲を作曲しているが、ほとんど現存していない。20歳の作品としては「悲しい歌」と「ため息」が残っている。また、作曲法の勉強の途上であったが、この2曲は現在デュパルクの歌曲の中で最も歌われる曲の中に入っている傑作である。1869年からミュンヘンやバイロイトへ旅行し、ドイツ音楽並びに、ワグナーの音楽に共感を覚える。そして、ドイツ・リートの影響から脱却し、フランス語の語感故に旋律美を損なうことのないフランスの歌曲を作曲した。ただし、1885年頃に精神に異常をきたし作曲ができない状態になる。従って、その2-3年後

フォーレが試みる機能と声の枠組みから出る音楽をつくるには至らなかった。歌曲は12曲ほど残しすべて破棄してしまい、現存していない。

(1) 後期ロマン派詩人

- ・ゴーチエ：[1]「ラメント」*Lamento* (1883) [2]「戦いがある国で」*Au pays où se fait la guerre* (1869).⁽¹¹⁾

- (2)・ボードレール：[1]「旅への誘い」*L'Invitation au voyage* (1870) [2]「前の世」*La Vie intérieure* (1884).

(3) 高踏派詩人たち

- ・ルコント・ド・リル：「フィディレ」*Phidylé* (1882).
- ・シルヴェストル：「遺言」*Testament* (1883).
- ・シュリ・プリュドム：「ため息」*Soupir* (1868).
- ・コペ：「波と鐘」*La Vague et la cloche* (1871)
- ・ラオール：[1]「フィレンツェのセレナーデ」*Sérénade florentine* (1880) [2]「夢見心地」*Extase* (1878) [3]「悲しい歌」*Chanson triste* (1868).

(4) 外国の詩人

- ・ムアー：「悲歌」*Élégie* (1874).

フランス歌曲で訳詞を使う例はペルリオーズやグノーのようなフランス歌曲の先駆者のみにその例があるわけではない。フォーレも1878年にビュッシーヌのイタリア語からの仏訳「夢の後に」がある。この傾向は後にルツセル Albert Roussel (1869-1937) のロッシェ Roché による中国語詩の仏訳による歌曲、たとえば「隔てられた恋人たち」*Amoureux séparés* (1908) 「賢い妻の答」*Réponse d'une épouse sage* (1927) にその例がある。さらに、ラヴェルの『五つのギリシャ民謡』*Cinq Mélodies populaires grecques* (1906) や『二つのヘブライの歌』*Deux Mélodies hébraïques* (1914) へと受け継がれて行く。

(5) 知られざる詩人

- ・ボニエール Robert de Bonnière (1850-1905)：「ローズモンドの館」*Le Manoir de Rosemonde* (1879).

ボニエールはデュパルクの最も親しい友人であった。『フィガロ』誌などに記

事を載せていた当時の文化人であった。小説や詩も書いていたが、デュパルクの歌曲になり、後世に名が遺った詩人である。

厳選した曲だけにどれも傑作であり、演奏会で歌われる曲の数々である。どの詩もそれなりの完成度に達していて、単なるロマンス向きの詩ではない。どれも密度の高い歌曲を創造するの貢献している。デュパルクの場合、詩の完成度がすぐれた音楽を喚起した、と言える。

◇ショソン Ernest Chausson(1855-1899)

裕福な上流家庭に生まれる。法律を学び、22歳で弁護士として上訴裁判所に迎えられる。古典と現代文芸・芸術に興味を持ち続けていた。1878年からマスネに、はじめは個人レッスンで、80年からパリ音楽院の作曲科で師事する。81年にローマ賞のコンクールに失敗すると音楽院を辞めて、ダンディに紹介されて、フランクに師事する。デュパルク、ダンディなどと共にフランクの最もすぐれた弟子たち(いわゆるフランキスト)の一人になる。S.N.M.(国民音楽協会)⁽¹²⁾での演奏活動などを通して、フォーレ、ブレヴィル、ドビュッシー等と親しくなる。彼の家にはフランキストのみならず、ドビュッシー、アルベニス等が集まり、詩人(マラルメ)、画家(ルノワール、ドガ、カリエール)も交えて芸術談義に花を咲かせていた。1886年にダンディがS.N.M.の会長の時に書記をつとめる。ここで多数の作品を発表している。

また、フランキストたちはワグネリアンでもあり、82年にパイロイトの祝祭劇場が再開されると、音楽仲間の友人たちとパイロイトにワグナーの楽劇を見に行く。

始めは「魅惑」や「イタリアのセレナード」など甘美な旋律の曲を書いていたが、ワグナーとの出会いから、大胆な音を使い出す。たとえば、82年から88年にかけて作曲したOp. 8の『四つの歌曲』*Quatre Mélodies*がある。「フランクからドビュッシー、ラヴェルを繋ぐ重要な役割を果たしている」⁽¹³⁾が、1899年、休暇中に別荘地で自転車事故にあい、不慮の死を遂げる。

作品も以下の通りあらゆるジャンルの音楽を作曲している。

- ・ピアノ曲：『風景』*Paysage*(1895)『いくつかの舞曲』*Quelques Danses*(1896)、など。
- ・室内楽曲：ピアノ三重奏曲(1882?)、弦楽四重奏曲(1899)など。
- ・管弦楽曲：交響詩『ヴィヴィアーヌ』*Viviane*(1882)、『詩』*Poème*(1896)、

『祭の夕べ』 *Soir de fête* (1898) など。

- ・舞台音楽：独唱と女声合唱のための歌による場面 *Scène lyrique* 『ジャンヌ・ダルク』 *Jeanne d'Arc* (1880?)、喜歌劇 *Comédie lyrique* 『マリアンヌの気まぐれ』 *Les Caprices de Marianne* (ミュッセ原作、1882)、歌劇 *Drame lyrique* 『エレーヌ』 *Hélène* (ルコント・ド・リル作、1884-86未完)、付随音楽 『嵐』 *Tempête* (シェークスピア原作ブショール仏訳1888-89)、付随音楽 『聖セシルの伝説』 *La Légende de sainte Cécile* (ブショール作、1891-92)、歌劇 *Drame lyrique* 『アーサー王』 *Roi Arthu* (1892-96)⁽¹⁴⁾。

ショソンの歌曲には、曲集として数曲まとめて発表した作品が多い。それらの制作及び刊行年代は以下の通りであるが、刊行年代が不明であるものは空白のままにしておく。なお、曲集の中の詩人が一人である場合は詩人別の分類に記す。

Op. 2 『七つの歌曲』 *Sept Mélodies* (1879-1882; 1882刊行)。

Op. 11 『三つの二重唱』 *Trois Duos* (1883-1886; 1924刊行)。

Op. 13 『四つの歌曲』 *Quatre Mélodies* (1885-1887; 曲集としての刊行年不詳)。

遺作 Op. posth. 36 『二つの歌』 *Deux Mélodies* (1896, 98; 1910刊行)。

歌曲集として、『歌曲集』 *Mélodies* (14曲収録) アメル社刊および、『二十曲集』 *20 Songs*, International Music Company 社刊が出ている。(Op. 2, 8, 11, 13, 14, 27, 28, 34, 36, 37収録)。

(1) 後期ロマン派詩人たち

- ・ゴーチエ：[1]「蝶々」 *Les Papillons* (Op. 2-3) [2]「最後の一葉」 *La dernière Feuille* (Op. 2-4) [3]「隊商」 *La Caravane* (Op. 14; 1887; 1890初演 S.N.M.)
- ・アッケルマン Louise Ackermann (1813-1890)：「エベ」 *Hébé* (Op. 2-6. フィリジア魔法によるギリシャの歌)。

この女流詩人は百科全書派の精神の洗礼を受けた父に育てられたが、非常に孤独で、憂鬱な少女時代を過ごした。ロマン派文学の全盛時代に詩を書く。若い頃の作品、『人間』 *L'Homme* (1830)、『神秘的な高揚』 *Elan mystique* (1832)、「断念」 *Renoncement* (1841)には深い悲観主義が見られる。43年にベルリンで出会ったアッケルマンと結婚したが、3年で寡婦となる。ニースへ行き、孤独の中で想を得て、数々の作品を発表する。『コント集』 *Contes* (1850-53)、『初めて

の詩集』*Premières Poésies* (1863)、『哲学詩集』*Poésies philosophiques* (1871)などを書く。彼女の悲観主義は感傷的であるが、知性がしっかりと根付いている悲観主義である。ロマン派より高踏派に近い作風である。

(2) 高踏派詩人たち

- ルコント・ド・リル：[1]「ナンニー」*Nanny* (Op. 2-1) [2]「蜂鳥」*Le Colibri* (Op. 2-7) [3]「蟬」*La Cigale* (Op. 13-4; 1887).
- シルヴェストル：「魅惑」*Le Charme* (Op. 2-2).
- トゥリエ：「森の中での結婚の歌」*Chanson de nocés dans les bois* (Op. 11-3).
- ラオール：「セレナーデ」*Sérénade* (Op. 13-2; 1887).

(3) 象徴派詩人たち

- ヴェルレーヌ：[1]「静けさ」*Appaisement* (Op. 13-1; 1885) [2]遺作 Op. posth. 34 『二つのヴェルレーヌの詩』*Deux Poèmes de Verlaine* (1898) 全2曲内訳→(1)「とても甘美な歌」*La Chanson bien douce* (2)「不幸な騎士」*Le Chevalier Malheur*.
- リシュパン：Op. 17 『ミアルカの歌』*Chansons de Miarka* (1888) 全2曲内訳→(1)「死者たち」*Les Morts* (2)「雨」*La Pluie*.
- メーテルランク Maurice Maeterlinck (1862-1949)：Op. 24 『温室』*Serres chaudes* (1893-96) 全5曲内訳→(1)「温室」(2)「倦怠の温室」*Serre d'ennui* (3)「けだるさ」*Lassitude* (4)「疲れた野獣」*Fauve las* (5)「祈り」*Oraison*.
- モレアス Jean Moreas (1856-1910)：「魅惑と魔法の森の中で」*Dans la forêt du charme et de l'enchantement* (Op. posth. 36; 1898).

アテネ生まれで、1882年よりパリに定住し創作する。デカダンスの詩人として処女詩集『浮き洲』*Les Syrtes* (1884)を発表する。成立しつつあった象徴派運動に参加し、『カンティレーヌ』*Les Cantilènes* (1886)を発表する。その後、自由詩に対抗し、ギリシャ・ローマの伝統への復活、ロンサルなどのプレイヤド派やマレルブの均整のとれた詩風、中世文学、ゴシック精神を求め、モラス等とエコール・ロマーネを興す。その頃の作品に『恋の巡礼』*Le Pèlerin passionné* (1891-93)、『処女林』*Les Sylves* 及び『新処女林』*Sylves nouvelles* (1894-96)がある。『スタンス集』*Les Stances* (1899-1901及び1920)で詩人として大成する。

(4) 象徴派周辺の詩人たち

- ・クロ Charles Cros (1842-1888) : 遺作 Op. posth 37『終わりなき歌』*Chanson perpétuelle* (1898) .

クロは詩人にして発明家でもある。独学でサンスクリットやヘブライ語、機械工学、物理学を学び、科学と文学の二足のわらじをはく人生を送る。カラー印刷法の研究や蓄音機を発明を、エディソンよりも前に考えた、といわれている。同時に、ヴェルレーヌ、ヴィリエ・ド・リラダン、F.コペと親交を結び、詩作をしたが、世に認められなかった。不条理と孤独の詩人で、詩集『白檀の小函』*Le Coffret de Santal* (1873)が代表作。1920年以降、シュルレアリストたちにより再評価される。

- ・モクレール Camille Mauclair (1872-1945) : Op. 27『三つの歌』*Trois Lieder* (1896)全3曲内訳→(1)「時たち」*Les Heures* (2)「バラード」*Ballade* (3)「花の冠」*La Couronnes* .

詩人、小説家、批評家、美術・音楽評論家としてあらゆるジャンルの近代思想に関心を持つ。バレス、メーテルランク、特にマラルメの影響を受けて、『ステファン・マラルメ』*Stéphane Mallarmé* (1894)を著す。他に『静寂の中の芸術』*L'Art en silence* (1900)、『オーギュスト・ロダン』*Auguste Rodin* (1901)、『シューマン』*Schumann* (1909)がある。リュニエ・ポー等と「芸術座」*Théâtre de l'Œuvre* を創立した。

- ・ヴィリエ・ド・リラダン : 「告白」*Aveu* (Op. 13-3 ; 1887) .
- ・ブルジェ Paul Bourget (1852-1935) : 「イタリアのセレナーデ」*Sérénade italienne* (Op. 2-5) .

父の任地のアミアンに生まれ、父の転勤先についてフランス各地に住んだあと、パリに出て、パリ大学で文学士となる。その後、ギリシャ文献学、医学を修める。さらにテーヌ Hippolyte Taine (1828-1893)に師事し、実証主義の影響を受ける。詩集『不安な生活』*La Vie inquiète* (1875)と『エデル』*Edel* (1878)を発表するが、認められなかった。そこで、心理学の視点から文学を批評する方法を試みる。時代の社会的・知的危機を分析する『現代心理学試論』*Les Essais de psychologie contemporaine* (1883)と『新現代心理学試論』*Les Nouveaux Essais de psychologie contemporaine* (1886)を発表し、批評家として認められた。その後、『残酷な謎』*Cruelle Énigme* (1885)、『嘘』*Mensonge* (1887)、『弟子』*Le Disciple* (1889)で小説家としても地位も確実にする。

- ・ブショール Maurice Bouchor (1855-1929) : [1]Op. 8『四つの歌曲』*Quatre*

Mélodies (1882-88; 1897刊行)→(1)「夜曲」*Nocturne* (1886) (2)「いにしへの恋」*Amour d'antan* (1882) (3)「悲しい春」*Printemps triste* (1883) (4)「私たちの思い出」*Nos Souvenirs* (1888). [2]Op. 19『愛と海の詩』*Poème de l'amour et de la mer* (1882-1890)内訳→第1部「水の花」*La Fleur des eaux* (1.「空気はリラの花の妙なる香りに満ちている」*L'air est plein d'une odeur exquise de lilas* 2.「そしてわたしの心は夏のこの朝に立ち上がった」*Et mon cœur s'est levé par ce matin d'été* 3.「何という嘆かわしき野蛮なる音」*Quel son lamentable et sauvage*)— 間奏曲 *Interlude*— 第2部「愛の死」*La Mort de l'amour* (1.「やがて青く陽気な島は」*Bientôt l'île bleue et joyeuse* 2.「風は枯れ葉を揺らす」*Le vent roulait les feuilles mortes* 3.「リラの花の咲く頃」*Le Temps de lilas*).

ブショールは詩人で、詩集『楽しい歌』*Chansons joyeuses* (1874)、『現代のファウスト』*Le Faust moderne* (1878)、『神はそれをお望みになれる』*Dieu le veut* (1888)、『死なねばならぬ』*Il faut mourir* (1907)など、非常に刺激的な題名の作品を書いている。ショソンとは親しかったようである。

フランスやベルギーの詩人たちのフランス詩による歌曲の他につぎの作品がある。

(5)・シェークスピア William Shakespeare：遺作 Op. posth. 28『四つのシェークスピアの歌』*Quatre Chansons de Shakespeare* (1897, ブショール仏訳)全4曲内訳→(1)「葬送の歌」*Chant funèbre* (『空騒ぎ』より) (2)「道化の歌」*Chanson de clown* (『十二夜』*La Nuit des rois*) (3)「愛の歌」*Chanson d'amour* (『以尺報尺』より) (4)「オフェリアの歌」*Chanson d'Ophélie* (『ハムレット』より).

(6) 知られざる詩人たち

・ジュネ Jounet：「妻への賛歌」*Cantique à l'épouse* (Op. posth. 36-1; 1896).

なお、二重唱につきの作品がある。

・バンヴィル：「夜」*La Nuit* (Op. 11-1) (二重唱あるいは二声合唱。1883).
 ・バルザック Honoré de Balzac (1799-1850)：「目覚め」*Réveil* (二重唱。Op. 11-2, 1886).

ショソンはユゴーやミュッセなど前世代の詩からは音楽的な靈感を得られなかったのであろうか？フォーレはユゴーを選び、それからゴーチエの作品に作曲したが、ショソンはゴーチエやルコント・ド・リルの詩から作曲を始めた。いずれも完成度の高い歌曲であり、ほとんどの曲が今日にいたるまで演奏されている。

◇ダンディ Vincent d'Indy (1851-1931)

三世紀以前から軍人の家柄、貴族の出身。母が出産時に死亡し、4年後に父も亡くなったので、伯爵夫人である厳格な祖母より廉直の精神、義務感、愛国心、カトリック教徒であること、勇気、勤勉であることなど、厳しくしつけられ、それが彼の生き方に大きく影響を与えた。法律の勉強をしていたが、音楽家になる決心をする。叔父 Wilfrid d'Indy はヴァイオリンを弾き、四重奏曲の楽団をつくっていた。ベルリオーズやロッシーニ Gioacchini Rossini (1792-1868) と親しくしていた。祖母は音楽の才能に恵まれていて、孫にソルフェージュやピアノの手ほどきをするが、間もなく、マルモンテル Antoine François Marmontel (1816-1898) とその弟子ディエメール Louis Diémer (1843-1919) のもとへ送る。13歳の時、ダンディは若いラヴィニャック Alexandre Jean Albert Lavignac (1846-1916 音楽教育者、音楽評論家) に和声を師事し、グリュック Christophe Willibald Gluck (1714-1787)、ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827)、ウェーバー Carl Maria von Weber (1786-1826)、メンデルスゾーン Felix Mendelssohn-Bartholdy (1809-1847) の曲に親しんだ。さらに、マイヤーベア Giacomo Meyerbeer (1791-1864) からはドラマのセンスを学ぶ。作曲は5歳から始めた。その頃の作品にオペレッタ、ピアノ曲、歌曲などの試作がある。18歳でワグナーを知る。1870年の普仏戦争では音楽を中断し、セダンの陥落で愛国心から国防軍に入隊する。夜警の間にスケルツォの構想がまとまり、後に『イタリア交響曲』の楽章の中に取り入れられる。この曲はパドルー楽団 Padeloup で翌年十二月に演奏され、マスネやビゼの賛辞を受ける。S.N.M.ではチェロ、コルネットも奏し、写譜などにも協力し、1873年からはS.N.M.のすぐれた伴奏者として活躍した。デュパルクにフランクを紹介され、この時点でフランクについて作曲を本格的に学ぶ。74年にパリ音楽院に入り、オルガンをフランクに師事する。1890年にフランクを失うが、後の1906年に著書『フランク』César Franck を書き、生涯敬愛した師の人柄と作品を心を込めて紹介することになる。

やがて、コロヌ楽団で合唱指揮や打楽器奏者として活躍。

1875年に結婚。翌年ワグナーの『四部作』をバイロイトで見て、楽劇に関心を持つ。87年の『ローエングリン』のパリ初演では合唱指揮を受け持つ。作曲家としても認められ、独唱、合唱、オーケストラの『鐘の歌』*Le Chant de la cloche*(シラーの原作、ダンディが脚色・作曲1879-1883)でパリ市大賞を受賞する。84-86年には『フランスの山人の歌による交響曲』あるいは、『セヴェンヌ山脈の交響曲』*Symphonie sur un chant montagnard français ou Symphonie cèvenole*を作曲する。1894年には、ボルド Charles Marie Anne Bordes (1863-1909)やギルマン Félix Alexandre Guilmant (1837-1911)と宗教音楽の演奏団体スコラ・カントルム Scola Cantorum を創設し、96年には宗教音楽専門の教育をする学校とした。しかし、1900年には音楽家を養成する音楽学校となった。

一方、アメリカへ演奏旅行に出かけ、フランク、ドビュッシー、ショソン等の音楽を紹介した。第一次世界大戦中に宗教音楽劇『聖クリストファの伝説』*La Légende de saint Christophe*(ダンディの台本1908-1915)を完成した。老齢に達するとフランク風やワグナー風ではなく、フランス風な簡潔で明瞭な作風に代わる。

歌曲と詩人について考えてみよう。舞台音楽に関しては、上記以外の作品では、オペラ・コミック『楡の木の下でわたしを待って』*Attendez-moi sous l'orme*(1876-82)はデュパルクの「ローズモンドの館」の詩人であるボニエールの台本であるが、それ以降、音楽喜劇『キニユラスの夢』*Le Rêve de Cinyras*(クールヴィル Xavier de Courville の台本、1922-23)以外は、ダンディ彼自身が台本を書いている。ワグナーが彼自身台本を書いて楽劇を作曲したことに影響されたとみてよからう。

(1) 中世の詩人

・シャルル・ドルレアン：ソプラノ二重唱「マドリガル」*Madrigal*(1928)。

(2) ロマン派詩人

・ユゴー：[1]「彼の名前」*Son nom*(1869) [2]「期待」*Attente*(1871) [3]「月の光」*Clair de lune*(1872)。

(3) ・ボードレール：「恋と頭蓋骨」*L'Amour et le Crâne*(1884)。

(4) 台本作家たち

- ・ボニエール：[1]「マドリガル」*Madrigal*(1872) [2]「ル・シッドの騎行」*La Chevauchée du Cid*(1876) [3]「駆け足で」*Au galop*(1876-1879) [4]「テクラの嘆き」*Plainte de Thécla*(シラー原作1880)。
- ・グラヴォレ：「幻影」*Mirage*(1903)。

(5) 知られざる詩人たち

- ・バズネリ Bazenery：「不安」*Angoisse*(1869-1871)。

(6) 自作詩

- [1]「アカデミー・フランセーズは我々三人を任命した」*L'Académie française nous a nommés tous trois*(1888) [2]「海の歌」*Lied maritime*(1896) [3]「初めての歯」(子守歌)*La Première Dent*(*Berceuse enfantine*) [4]「恋人の目」*Les Yeux de l'aimée*(1904) [5]「ティナのための小歌」*Ariette pour Tina*(1927)。

この他に、ダンディは教会声楽曲と世俗声楽曲を多数作曲した。世俗声楽曲には、すでに述べた「鐘の歌」や「海の冒険者たちの歌」*La Chanson des aventuriers de la mer*(ユゴー詩、バリトン、男声合唱、ピアノ、弦楽五重、1872)など、重唱、合唱と管弦楽という形式の曲である。ここでは割愛する。

歌曲と詩の関係を見ると、他の作曲家に比べて非常に限られた詩人の作品しか選んでいないのが特徴である。ここでもオペラ関係の作品と同様に1880年代以降、自作の詩に作曲するという傾向がある。フランス歌曲の中でグノーを始めとしてその例は多数あるが、作品を徹頭徹尾自作で、という創作態度ではない。余技として控えめに自作の詩に作曲している。また、ドビュッシーの場合にもつぎに示すように、いくつかの自作詩による歌曲があるが、一方にボードレール、ヴェルレーヌ、マラルメなどの詩によるすぐれた多数の歌曲が存在している。この点で、ワグナーの制作態度を意識していることが感じられるのである。

◇ドビュッシー-Achille Claude Debussy(1862-1918)

質素な家庭に生まれたが、ヴェルレーヌ夫人マチルドの母親モーテ夫人にピアノの手ほどきを受ける。モーテ夫人はショパンの弟子であった、という説もあるピアニストであるが、すぐに弟子の天分を発見し、10歳(1872)の時、パリ音楽院に送る。ラヴィニャックに楽理、マルモンテルにピアノ、バズィーユ Auguste Bazille にピアノ伴奏、ギロー-Ernest Guiraud(1837-1892)に作曲を師事した。しかし、家庭が貧しいので学資を稼ぐ必要があり、あちこちでピアニストとして働く。1879年にはウィルソン=ブルーズ夫人 Marguerite Wilson-Pelouze の三重奏団のピアニストとしてロワール河流域の名城シュノンソーに住み込む。その年、チャイコフスキーの庇護者であるメック夫人 Nadeja von Meck のピアニストとして、その一家と共に1880年以降三度の夏をイタリア、スイス、さらに、オーストリアやロシアへ旅行をした。79年頃からすでに作曲を始めていたドビュッシーは、チャイコフスキー-Piotr Ilitch Tchaïkovski(1840-1893)、ポロディン Alexandre Borodine(1833-1887)などのロシア音楽、さらにジプシー音楽にも親しむことが出来た。パリではヴァニエ夫人 Marie-Blanche Vasnier を知り、その一家と親しくなる。文学や一般教養をこの家庭で養われる。1884年、カンタータ『放蕩息子』*L'Enfant prodigue* でローマ賞を受賞し、ヴィラ・メディチへ行く(1885-87)。しかし、あまりに歴史的なものを抱えているローマという都市に圧倒されて、作曲家として実りのある仕事が出来ないまま帰国する。

帰国後にはヴァニエ家から遠ざかり、若い芸術家たちに近づき、特にショソンと親しくする。他に詩人ルイ Pierre Louÿs(1870-1925)、彫刻家カミーユ・クローデル Camille Claudel(1864-1943)と親しくする。

すでに、ラヴィニャックによりワグナーの音楽を紹介されていたが、1888年バイロイトへ楽劇を見に行き、深い感銘を受ける。翌年の万博では、ロシアや東洋の民族音楽を聞き、音楽的な啓示を受ける。1890年からマラルメの火曜会に唯一の音楽家として出席する。それにより、象徴派の詩人たちを知り、1891年にはサティと出会い、サティのよき忠告者になる。

作品は、歌劇：『ペレアスとメリザンド』*Pelléas et Mélisande*(メーテルリンク原作；1893-1902)、管弦楽曲：『牧神の午後の前奏曲』*Prélude à l'après-midi d'un faune*(1892-94)、『海』*La Mer*(1903-05)、ピアノ曲：『ベルガマス組曲』*Suite bergamasque*(1890-1905)、『映像』*Images*(1905)、『映像II』*Images 2ème série*(1907-08)その他多数がある。

歌曲に関しては、ほぼ70曲作曲したといわれている⁽¹⁵⁾。はじめミュッセの詩に作曲し、それからバンヴィル、ゴーチエ、ルコント・ド・リル、ヴェルレーヌ、ボードレル、そして友人のルイの詩、自作の詩に作曲した後、中世から十七世紀の詩人の作品に作曲するようになる。しかし、1913年にマラルメの詩集が出版されると、その中から三篇を選び作曲する。そして、最後の歌曲は自作の詩によっている。

(1) 中世の詩人たち

- ・シャルル・ドルレアン： [1] 『三つのフランスの歌』 *Trois Chansons de France* (1904) 全3曲内訳→(1) 「時はその外套を脱ぎて」 *Le temps a laissé son manteau* (2) 「楽しみ(プレザンス)がみまかりたれが」 *Pour que Plaisance est morte*.
- ・ヴィヨン François Villon(1431頃-1463以降)： [1] 「フランソワ・ヴィヨンの三つの譚歌」 *Trois Ballades de François Villon* (1910)→(1) 「恋人に贈れるヴィヨンの譚歌」 *Ballade de Villon à s'amy* (2) 「母の願いによりて聖母に祈れる譚歌」 *Ballade que Villon fait à la requeste de sa mère pour prier Notre-Dame* (3) 「パリの女たちの譚歌」 *Ballade des femmes de Paris*.

(2) 十七世紀の詩人

- ・トリスタン・レルミット Francois Tristan L'Hermite(1601頃-1665)： [1] 『三つのフランスの歌』 *Trois Chansons de France* (1904) 全3曲中→(2) 「洞窟」 *La Grotte*. [2] 『二人の恋人たちの散歩道』 *Le Promenoir des deux amants* (1904-10) 全3曲内訳→(1) 「この暗き洞窟のほとり」 *Auprès de cette Grotte sombre* (1904) (2) 「わが勧めを信ぜよ、愛しきクリメーヌよ」 *Crois mon conseil, chère Climène* (1910) (3) 「汝の面輪を見てわれはおののく」 *Je tremble en voyant ton visage* (1910).

(3) ロマン派詩人

- ・ミュッセ： [1] 「月に寄せるバラード」 *Ballade à la lune* (1879頃) [2] 「マドリッド」 *Madrid* (1879頃) [3] 「ロンドー」 *Rondeau* (1882).

(4) 後期ロマン派詩人

- ・ゴーチエ： [1] 「セギディリヤ」 *Séguidille* (1881頃) [2] 「死後の嬌態」 *Coquetterie postume* (1883).

- (5)・ボードレール： [1] 『ボードレールの五つの詩』 *Cinq Poèmes de Charles Baudelaire* (1887-89) 全5曲内訳→(1) 「露台」 *Le Balcon* (2) 「夕べの諧調」 *Harmonie du soir* (3) 「噴水」 *Le Jet d'eau* (4) 「瞑想」 *Recueillement* (5) 「恋人たちの死」 *La Mort des amants*.

(6) 高踏派詩人たち

- ・ルコント・ド・リル： [1] 「ジャーヌ」 *Jane* (スコットランドの歌 *Chanson écossaise*) [2] 「亜麻色の髪の乙女」 *La Fille aux cheveux de lin* (スコットランドの歌) [3] 「牧歌」 *Églogue* (二重唱).
- ・バンヴィル： [1] 「星の夜」 *Nuit d'étoiles* (1880頃) [2] 「気まぐれ」 *Caprice* (1880頃) [3] 「夢想」 *Rêverie* (1880頃) [4] 「願い」 *Souhait* (1881) [5] 「西風－フィリスへのトリオレ」 *Zéphyr Triolet à Philis* (1881) [6] 「薔薇」 *Les Roses* (1881頃) [7] 「ピエロ」 *Pierrot* (1881頃) [8] 「愛し合って眠ろう」 *Aimons-nous et dormons* (1881頃) [9] 「リラ」 *Le Lilas* (1882) [10] 「艶なる宴」 *Fête galante* (1882) [11] 「小夜曲」 *Sérénade* (1882頃).

(7) 象徴派詩人たち

- ・ヴェルレーヌ： [1] 「操り人形」 第1稿 *Fantoches* (1882) [2] 「ひそやかに」 *En sourdine* (第1稿, 1882) [3] 「マンドリン」 *Mandoline* [4] 「無言劇」 *Pantomime* (1882) [5] 「月の光」 第1稿 *Clair de lune* (1882). [6] 『忘れられた小歌』 *Arriettes oubliées* (1880-1888) 全6曲内訳→(1) 「そは恍惚」 *C'est l'extase langoureuse* (1888) (2) 「町に雨が降るように」 *Il pleure dans mon cœur* (1888) (3) 「木々の影」 *L'ombre des arbres* (1880年頃) (4) 「木馬」 *Chevaux de bois* (5) 「緑」 *Green* (6) 「憂鬱」 *Spleen*. [7] 『三つの歌曲』 *Trois Mélodies* (1891) 全3曲内訳→(1) 「海は大聖堂よりも立派で」 *La mer est plus belle* (2) 「角笛の音は嘆き悲しみ」 *Le son du cor s'afflige* (3) 「垣根のつらなり」 *L'échelonnement des haies*. [8] 『艶なる宴』 第1集 *Fêtes galantes* (1891) 全3曲内訳→(1) 「ひそやかに」 *En sourdine* (2) 「操り人形」 *Fantoches* (3) 「月の光」 *Clair de lune*. [9] 『艶なる宴』 第2集

- Fêtes galantes* (1904) 全3曲内訳→(1)「初なものたち」*Les ingénus* (2)「半歌神」*Le Faune* (3)「感傷的な対話」*Colloque sentimental*.
- ・マラルメ Stéphane Mallarmé (1842-1898) : [1]「あらわれ」*Apparition* (1884). [2]「マラルメの三つの詩」*Trois Poèmes de Stéphane Mallarmé* (1913) 全3曲内訳→(1)「ため息」*Soupir* (2)「あだな願い」*Placet futile* (3)「扇」*Eventail*.
 - ・ルイ Pierre Louÿs : 『ビリティスの歌』*Chansons de Bilitis* (1897) 全3曲内訳→(1)「牧羊神(パン)の笛」*La Flûte de Pan* (2)「髪」*La Chevelure* (3)「泉の妖精(ナーイアド)の墓」*Le Tombeau des Naiades*.
 - ・ブルジェ : [1]「美しい夕べ」*Beau Soir* (1880頃) [2]「ロマンス(時の流れの得も言われぬ静寂)」*Romance [Silence ineffable de l'heure]* (1883) [3]「音楽」*Musique* (1883) [4]「感傷的な風景」*Paysage sentimental* (1883) [5]「ロマンス」*Romance* (1884) [6]「アリエルのロマンス」*La Romance d'Ariel* (1884) [7]「哀惜」*Regret* (1884) [8]『二つのロマンス』*Deux Romances* (1891) 全2曲内訳→(1)「ロマンス」*Romance* (2)「鐘」*Les Cloches*.

(8) 象徴派周辺の詩人たち

- ・ブショール : [1]「悲しい歌」*Chanson triste* (1883頃)⁽¹⁶⁾ [2]「水の花」*Fleur des eaux* (1883頃).
- ・クロ : 「弓」*L'Archet* (1883頃).

(9) 民衆詩人

- ・イスパ Vincent Hyspa (1865-1938) : 「眠れる森の美女」*La Belle au bois dormant* (1890)

「黒猫」*Chat noir*、「三文芸術」*Quat'z Arts*、「赤い月」*La Lune rousse* などのキャバレーで人気を集めたシャンソン作家で、政治批判や人気歌手のパロディによる詩を特異とした。

(10) 台本作家たち

- ・グラヴォレ : 「庭の中で」*Dans le jardin* (1891)
- ・ペテル René Peter : 『死の悲劇』のための「子守歌」*Berceuse pour La Tragedie de la mort*.

(11) 知られざる詩人たち

- ・ジロ André Girod：「麦の花」*Fleur des bles* (1880頃)。
- ・ル・ロワ G.Le Roy：「みつげの鐘」*Angélus* (1891)。

ギュスタール・ルロワ Gustave Leroy (1816-60) というブラシ工場の工員出身のシャンソン作家・歌手がいる。しかし、年代的にずれているので、恐らく別人であろう。

(12) 作詞者不詳

- 「中国のロンデル」*Ronde chinois* (1881頃)。
- 「スペインの歌」*Chanson espagnole*。

(13) 自作詩

[1]『叙情的散文』*Proses lyriques* (1892-93) 全4曲内訳→(1)「夢」*De rêve* (2)「砂浜」*De grève* (3)「花」*De fleurs* (4)「夕べ」*De soir*。[2]「白夜」*Nuits blanches* (1889-1902) [3]「もう家がない子供たちのクリスマス」*Noël des enfants qui n'ont plus de maison* (1915)。

フォーレとは17歳ほどの年齢の開きがあるが、ドビュッシーはフォーレとほぼ同じ頃ヴェルレーヌの詩からフランス歌曲に新しい方向を開いたのである。両者とも、ワグナーの半音階和声、教会旋法を楽曲に取り入れることにより、新しいフランスの音を見いだしたのである。フォーレにおいてはヴェルレーヌに続き、ヴァン・レルベルクが登場するが、ドビュッシーはルイや中世の詩人の作品による歌曲を作曲し、さらにマラルメの詩へ行き着く。マラルメの詩を作曲したドビュッシーはフォーレの場合以上に、すぐれた詩人の完成度の高い詩により新しい音楽の方向を見いだしている。それに対して、フォーレは二十世紀の無名の詩人により、大曲を完成した。二人の偉大なる音楽家の作品態度の顕著な差異がある。

新しい時代の担い手

◇サティ Erik Satie (1866-1925)

ノルマンディのオンフルールに生まれ、幼少時をその地で過ごす。母親の死去(1872)にともない祖父母のもとで育てられる。音楽の手ほどきはニーデルメ

イェール校出身者から受ける。1876年からパリに住む父のもとへ行き、パリ音楽院に入学するが、成績はふるわなかった。間もなく独自の音楽を見つけて、歌曲『三つの歌曲』*Trois Mélodies*、『悲歌』*Élégie*、『シャンソン』*Chanson*、ピアノ曲『三つのサラバンド』*Trois Sarabandes* (1887)、『三つのジムノペディ』*Trois Gymnopédies* (1888)を書く。ドビュッシーが激励するが、キャバレーなどの音楽に身を委ねる。しかし、そこで多数の詩人や画家に出会い、新たなインスピレーションを与えられて新しい音楽を作曲する。1917年にはディアギレフの率いるロシアバレエ団と共に『パレード』*Parade*を制作し、若い世代の音楽家たちに新しい音楽の可能性を示した。

(1) 二十世紀の詩人

- ・ファルグ Léon-Paul Fargue (1876-1947) : [1] 『三つの歌曲』*Trois Mélodies* (1916) 全3曲の内→(1) 「銅像」*La Statue de Bronze*
[2] 『潜水人形』*Ludions* (『L.P.ファルグの五つの詩』*Cinq Poèmes de L.-P. Fargue* より) 全5曲内訳→(1) 「鼠の歌」*Air du rat* (2) 「憂鬱」*Spleen* (3) 「アメリカの蛙」*La Grenouille américaine* (4) 「詩人の歌」*Air du poète* (5) 「猫の歌」*Chanson du chat*.

(2) 民衆詩人

- ・イスパ：「やさしく」*Tendrement* (1897).

(3) 知られざる詩人たち

- ・ボノ Dominique Bonnaud とブレス Numa Bles : 「帝国の歌姫」*La Diva de l'empire* (1900).
- ・シャリュ René Chalupt : 『三つの歌曲』*Trois Mélodies* (1916) 全3曲の内→(3) 「帽子屋」*Le Chapelier*.
シャリュはルッセルの歌曲、『二つの歌曲』*Deux Mélodies* op. 50の「帰りの時間」*L'Heure du retour* (1934)と「危険に陥った心」*Cœur en péril* (1933)の詩人である。
- ・ゴドブスカ Mimi Godebska : 『三つの歌曲』*Trois Mélodies* (1916) 全3曲の内→(2) 「伊達男(ダフェネオ)」*Daphénéo*.
十九世紀末から今世紀にかけて芸術家の擁護者としてパリの社交界にその名を響かせたミシア・ゴドブスカ Misia Godebska (1872-1945)の姪であることは

ほぼ間違いない。楽譜には M.God と記されている。

- ・コンタミン・ド・ラトゥール Contamine de Latour : [1]『三つの歌曲』 *Trois Mélodies* (1886) 全3曲内訳→(1)「天使」 *Les Anges* (2)「花」 *Les Fleurs* (3)「シルヴィ」 *Sylvie* [2]「悲歌」 *Élégie* (1886) [3]「シャンソン」 *Chanson* (1886).
- ・パコリー *Henry Pacory* : 「あなたが好きだ」 *Je te veux* (1900).
- ・ペラダン *Péladan* : 「国旗賛歌」 *Hymne pour le "Salut Drapeau"* (1891).

(4) 作者不詳

『四つの小さな歌曲』 *Quatre Petites Mélodies* (1920) 全4曲内訳→(1)「悲歌」 *Elegie* (2)「踊り子」 *Danseuse* (3)「歌」 *Chanson* (4)「別れ」 *Adieu*.

(5) 自作詩

[1]『三つの恋の詩』 *Trois Poèmes d'Amour*.

以上列举した通り、文学史に遺る詩人はファルグのみである。知られざる詩人たちの新感覚、あるいは奇想天外のナンセンスな詩に想像力を刺激され、サティはもの見事に、ブルジョワジーの音楽にモンマルトルの大衆音楽を結び付けて、新しい音楽を創った。この流れはミヨー *Darius Milhaud* (1892-1973)、プラंक *Francis Poulenc* (1899-1963) など次代を背負うフランス六人組に受け継がれる。

◇アーン *Reynaldo Hahn* (1875-1947)

ベネズエラに生まれ、フランスに帰化する。パリ音楽院ではマスネに師事したが、14歳で作曲を始めた天才肌の作曲家で、美声の持ち主で、彼の音楽はもてはやされた。ある。ブルースト *Marcel Proust* (1871-1922) や女優のサラ・ベルナール *Sarah Bernhardt* (1844-1923) 等とも親しかった。作曲家であると同時に、オペラの指揮者として活躍した。

作品は『二十歌曲集』 *Vingt Mélodies*、第1巻 *Vol. I* (1888-1900)、第2巻 *Vol. II* (1900-1921) の2巻、『灰色の歌』 (1893)、『ラテン習作』 (1900)、『傷ついた葉』 (1906)、『ロンデル集』 (1927, ユージェル社刊) に収められている。

(1) 中世・古典派詩人

- ・オルレアン：『ロンデル集』 *Rondels* 全12曲の内2、6、8曲目→(2)「あなたの慈悲に身を委ねる」 *Je me metsz en vostre mercy* (6)「窓の光を保ち給え」 *Gardez le trait de la Fenêtre* (8)「小館に捕らえらしとき」 *Quand je fus pris au pavillon*.
- ・ヴィヨ Théodore de Viau(1590-1626)：「クロリスへ」 *A Chloris*.
- ・ラシーヌ：「賛歌」 *Cantique*.

(2) ロマン派詩人

- ・ユゴー：[1]「夢想」 *Réverie* [2]「わたしの歌に翼があれば」 *Si mes vers avaient des ailes* [3]「夜に星が輝かないとき」 *Quand la nuit n'est pas étoilée* [4]「ぼくがくちづけしたので」 *Puisque j'ai mis sur ma lèvre*.

(3) 後期ロマン派詩人

- ・ゴーチエ：[1]「ただひとり」 *Seule* [2]「夜」 *La Nuit* [3]「不実」 *L'Infidèle*.

(3) 高踏派詩人

- ・ルコント・ド・リル：[1]「フィディレ」 *Phidylé* [2]『ラテン習作』 *Études latines* (1900)全10曲内訳→(1)「リディ」 *Lydie* (2)「ネエール」 *Néère* (3)「サリナム」 *Salinum* (4)「タリアルク」 *Thaliarque* (5)「リデ」 *Lydé* (6)「ヴィル・ポタビス」 *Vile potabis* (7)「チアングリス」 *Tyandarís* (8)「フォロエ」 *Pholoe* (9)「フィディレ」 *Phidylé* (10)「フィリス」 *Phyllis*.
- ・バンヴィル：[1]「恋する女」 *L'Ennamourée* [2]「最後の願い」 *Le Dernier Vœu* [3]『ロンデル集』 *Rondels* 全12曲の内1、3、4、5、7、9、10、11曲目→(1)「その日」 *Le Jour* (3)「春」 *Printemps* (5)「空気」 *L'Air* (7)「魚釣り」 *La Pêche* (9)「星々」 *Les Étoiles* (10)「秋」 *Automne* (11)「夜」 *La Nuit*.
- ・コペ：「五月」 *Mai*.
- ・トゥリエ：「景色」 *Paysage*.
- ・マンデス：[1]『ロンデル集』 *Rondels* 全12曲の内12曲目→(12)「歌ったことの思い出」 *Le Souvenir d'avoir chanté*.
- ・ディエルクス Léon Dierx(1838-1912)：「しおれた花」 *Fleur fanée*.
- ・ラオール：「夜曲」 *Nocturne*.

・シュリ・ブリュドム：「水の上で」*Sur l'eau*.

(4)・ドーデ：「葡萄収穫の三日間」*Trois jours de vendange*.

(5) 象徴派詩人

- ・ヴェルレーヌ：[1]「捧げもの」*Offrande Inc.—Voici des fruits* [2]「艶なる宴」*Fêtes galantes (Mandoline)* [3]「不信心なるもの」*L'Incrédule* [4]「牢獄より」*D'une Prison* [5]『灰色の歌』*Chansons grises* (1893)全6曲内訳→(1)「秋の歌」*Chanson d'automne* (2)「ふたりして」*Tous deux Inc.—Donc, ce sera par un clair jour d'été* (3)「小径は何処までもつづき」*Allée sans fin* (4)「ひそやかに」*En sourdine* (5)「妙なる時」*L'Heure exquise* (6)「悲しい風景」*Paysage triste Inc.—L'ombre des arbres* (7)「よき歌」*La Bonne Chanson Inc.—La dure épreuve va finir*
- ・モレアス：[1]「テオーヌ」*Théone* [2]「夜に」*Dans la nuit* [3]「煙」*Fumée* [4]ka『傷ついた葉』*Les Feuilles blessées* 全11曲内訳→(1)「空に向かって樹齢百年の樫の老木が聳え立つ」*Dans le ciel est dressé le chêne séculaire* (2)「舗石の上にわが夜の足音が響く」*Encor sur le pavé, sonne mon pas nocturne* (3)「秋が再び訪れるとき」*Quand reviendra l'automne* (4)「銀色の美しい月」*Belle lune d'argent* (5)「私が来て坐るとき」*Quand je viendrai m'asseoir* (6)「春の水」*Eau printanière* (7)「だからあなたが花咲くとき」*Donc vous allez fleurir encor* (8)「みなぎる精気の供」*Compagne de l'éther* (9)「私が瞑想する間に」*Pendant que je médite* (10)「腕輪となった薔薇の花」*Roses en bracelet* (11)「日没の光に」*Aux rayons du couchant*.
- ・レニエ：「泉」*Les Fontaines*.

(6) 知られざる詩人たち

- ・ヴィケール Vicaire：「田舎の墓」*Cimetière de campagne*
- ・ルナル A. Renard：「白鳥たち」*Les Cygnes*
- ・ブランシュコット夫人：[1]「捨てられた女」*La Délaiquée* [2]「親しき傷」*La Chère Blessure*
- ・マーグル Magre：[1]「泉の畔の歌」*Chanson au bord de la fontaine* [2]「もっとも美しい贈り物」*La plus beau présent*

- ・ドーファン Daupin：「リラに来る鶯」*Le Rossignol des lilas*
- ・アンヌヴェ Henneve：「無名の死者たちに」*A nos morts ignorés*
- ・ヴァカレスコ Vacaresco：「わが青春」*Ma jeunesse*
- ・ド・サククス De Sax：「穏やかな平和」*La douce Paix*

ユゴー、ルコント・ド・リル、バンヴィル、ヴェルレーヌなどの詩を使い、新しい音を使いながらも、非常に施律の美しい、洒落た歌曲を書いている。完成度の高い詩を使いながら、ドビュッシーやラヴェルの知的な音楽に対して、感性、感覚に快楽を与える音楽である。しかも、飽くまでも洗練された音楽である。ドビュッシーやラヴェルの音楽以上にブルジョワジーのサロンに好まれた洗練された音楽である。

◇ラヴェル Maurice Ravel (1875-1937)

スイス出身の父は2行程過給エンジンの発明などで名高い技師であった。1870年に鉄道敷設の為にスペインに招かれ、4年後にバスク出身のマリ・ドゥルアール Marie Delouart と結婚した。翌年スペインの国境に近いピレネー山麓のシブール Ciboure で長男モリスが生まれる。3ヶ月後にパリへ移り、3年後に弟が生まれる。音楽好きな父は二人の息子を音楽家に育てたいと思っていたが、結局モリスだけがその道に進む。7歳でピアノをはじめ、12歳で声楽を学ぶ。1889年に14歳でパリ音楽院のピアノ科に入る。このクラスで無二の親友 ヴィニェス Ricardo Viñes (1875-1943) と出会う。

1889年のパリで開かれた万国博覧会で異国の風俗、タヒチの踊り、ジャワの踊り、ガムラン音楽、中国の塔、イスラム、カンボジアの寺院を見て心をひかれた。東洋の民謡、旋律がラヴェルの音楽にあらわれるのはこの異文化との出会いが大きく影響したと考えられる。1893年にはピアノ曲『グロテスクなセレナーデ』*Sérénade grotesque* をはじめとする曲を書き始めた。その後、1897年にジェダルジュ André Gédalge (1856-1926) に対位法を、フォーレに作曲法を師事する。一方マラルメやポー Edgar Poe (1809-1849) の文学を愛し、サティやシャブリエの音楽に興味を抱く。自由な教授法をとるフォーレのもとで、学校では許されないような表現も取り入れた音楽を書いて、才能が花開く。友人の音楽家 ヴィニェス、サティ、ロラン・マニユエル Roland-Manuel (1891-1966)、アンゲルプレシュト Désiré-Émile Inghelbrecht (1880-1965)、セヴラック Joseph-Marie Déodat de Séverac (1872-1921)、ファリャ Manuel de Falla

(1876-1946)、シュミット Florent Schmitt(1870-1958)、ストラビンスキー Igor Féodorovitch Stravinski(1882-1971)、ロシアバレエを率いるディアギレフ Serge de Diaghilev(1872-1929)、詩人のレオン・ポール・ファルグ、作家ヴァレリ・ラルボー Valery Larbaud(1881-1942)等は、ドビュッシーと同様、二十世紀音楽を方向付ける音楽家である、トラヴェルは認識していた。ピアノ曲は『亡き王女の為のパヴァヌ』*Pavane pour une infante défunte*(1899)、『水の戯れ』*Jeux d'eau*(1901)、『鏡』*Miroirs*、『夜のガスパール』*Gaspard de la nuit*(1908)、『クーブランの墓』*Le Tombeau de Couperin*(1914-17)、管弦楽曲『スペイン狂詩曲』*Rapsodie espagnole*(1907-08)、『ボレロ』*Boléro*(1928)がある。バレエ音楽には、『ダフニスとクロエ』*Daphnis et Chloé*(1909-12)、『ラ・ヴァルス』*La Valse*(1919-20)があり、ロシア・バレエのフォーキン Michel Fokine(1880-1942)が振り付けをしている。

声楽曲としては、ローマ賞のために書いた初期のカンタータを除くと、一幕音楽劇『スペインの時』*L'Heure espagnole*(フラン＝ノアン Franc-Nohain 台本, 1911)とコレット Sidonie Gabrielle Colette(1873-1954)の台本による2部からなる幻想的音楽劇『子供と魔法』*L'Enfant et les Sortilège*(1920-25)などの舞台音楽がある。

歌曲は48曲を数えることができる。ほかに母音唱法 *Vocalise en forme de habanera*(1907) 1曲がある。

(1) 十六世紀の詩人たち

- ・マロ Clément Marot(1496-1544)：『二つの短詩』*Deux Épigrammes de Clément Marot*(1899)→(1)「雪をぶつけるアンヌ」*D'Anne qui me jecta de la neige* (2)「スピネットを奏でるアンヌ」*D'Anne jouant de l'espinette*.
- ・ロンサール Pierre de Ronsard(1524-1585)：[1]「ロンサールが己が魂に」*Ronsard à son âme*(1923-24).

(2) 十八世紀の詩人

- ・パルニ男爵 Évariste Désire de Forges, vicomte de Parny(1753-1814)：『マダガスカルの中の三つの歌』*Trois Chansons madécasses*(1925-26)全3曲内訳→(1)「ナンドーヴ」(おお、美しいナンドーヴ)*Nahandove...* (ô belle Nahandove) (2)「アウア」(白人に気を付けろ!)*Aoua* (Méfiez-vous des blancs) (3)「心地よい」*Il est doux...*

女性の美しさを讃えた詩集『官能的な詩』*Poesies érotiques*を著す。愛する女への愛惜に満ちた夢や心の平和を願う牧歌的な歌を書き、その優雅さと繊細さはロマン派の叙情性を予告している。

(3) 高踏派詩人

- ・ルコント・ド・リル：「糸車の歌」*Cnanson du rouet* (1897)。

(4) 象徴派詩人たち

- ・ヴェルレーヌ：[1]「大いなる黒い眠り」*Un grand sommeil noir* (1895) [2]「草の上」*Sur l'herbe* (1907)。
- ・マラルメ：[1]「聖女」*Sainte* (1806)。 [2]『マラルメの三つの詩』*Trois Poèmes de Stéphane Mallarmé* (1913) 全3曲内訳→(1)「ため息」*Soupir* (2)「あだな願い」*Placet futile* (3)「臀部から一飛びに浮かび出て」*Surgi de la croupe et du bond*。
- ・レニエ Henri de Regnier (1865-1936)：「海の向こうからやってきた大いなる風」*Les Grands Vents venus d'outre-mer* (1906)。

(5) その周辺の詩人たち

- ・ルナール Jules Renard (1864-1910)：[1]『博物誌』*Histoires naturelles* (1906) 全5曲内訳→(1)「孔雀」*Le Paon* (2)「こおろぎ」*Le Grillon* (3)「白鳥」*Le Cygne* (4)「かわせみ」*Le Martin-pêcheur* (5)「ほろほろ鳥」*La Pintade*。
- ・ヴェラーレン Emile Verhaeren (1855-1916)：「かくも悲しく」*Si morne* (1899)。

ベルギーの詩人。羅紗織り業者の長男に生まれる。法律を学び、弁護士となるが、文学への情熱が捨て難く、1881年創刊のベルギー象徴派の雑誌『若いベルギー』*La Jeune Belgique*の有力メンバーになり、処女詩集『フランドルの女たち』*Les Flamandes* (1883)を発表する。つづいて、『夜』*Les Soirs* (1888)、『崩壊』*Les Débauches* (1888)、『黒い炬火(たいまつ)』*Les Flambeaux noirs* (1890)で詩人としての地位を確立した。現代社会の詩的な美、人間の努力の偉大さを発見して社会主義思想に共鳴する。生のよろこびをうたう思想は閉ざされた象徴主義の風土からの脱出を志していた若い世代の共感を得た。第一次大戦中、愛国的なパンフレットを書き続けていたが、1916年交通事故で亡くなっ

た。

- ・クリングゾール Léon Leclère, dit Tristan Klingsor (1874-1966) : 『シェエラザード』 *Schéhérazade* (1903) 全3曲内訳→(1)「アジア」*Asie* (2)「魔法の笛」*La Flûte enchantée* (3)「つれない男」*L'Indifférent*.

ラヴェルの生涯の友の一人である。詩形の自由は象徴主義の影響が見られる。『シェエラザード』*Schéhérazade* (1903)、『放浪者の詩』*Poèmes de Bohème* (1913)、『ユモレスク』*Humoresques* (1921)等がある。また、画家であり、音楽家でもあった。絵画『アンジェ付近』*Environs d'Angers* や『シャロンヌの眺め』*Vue de Chalonnes* があり、音楽作品では『2挺のヴァイオリンの為の小組曲』*Petite Suite pour deux violons* などがある。

(6) 二十世紀の詩人たち

- ・ファルグ：「夢」*Rêves* (1927).

ラヴェルの生涯の友の一人で、マラルメの弟子であり、ヴェルレーヌ、ジャム Francis Jammes (1868-1938)、ラフォルグ Jules Laforgue (1860-1887)などに私淑していた。散文詩、自由詩に叙情性豊かな想像力で詩作をした。『タンクレド』*Tancredi* (1895)や『詩集』*Poèmes* (1912)、『音楽の為に』*Pour la musique* (1914)などがある。

- ・モーラン Paul Morand (1888-1976) : 『ドゥルシネア姫に心をよせるドン・キホーテ』*Don Quichotte à Dulcinée* (1932-1933) 全3曲内訳→(1)「ロマネスクな歌」*Chanson romanesque* (2)「叙事的な歌」*Chanson épique* (3)「酒の歌」*Chanson à boire*.

1913年より外交官としてロンドン、ローマ、ブカレスト、ベルンに滞在した。廣い見聞を生かして、また、異国趣味に富んだ作品を書いて二大戦間の代表的な作家となる。

詩集には『アーク灯』*Lampes à arc* (1919)等がある。しかし、出世作は『三人女』*Tendres Stocks* (1921)、『夜ひらく』*Ouvert la Nuit* (1922)、『夜とざす』*Fermé la Nuit* (1923)である。戦後の作品には『ハプスブルグ家の白衣の夫人』*La Dame blanche des Habsbourg* (1963)、『ヴェネチア』*Venise* (1971)がある。

(7) 民謡の仏訳あるいは原語による歌曲

- [1]『五つのギリシャ民謡』*Cinq Mélodies populaires grecques* (カルヴォコレッシ: Calvo-coressi 訳, 1906) 全5曲内訳→(1)「花嫁の目覚め」*Le Réveil de la*

mariée (2)「彼方へ、教会の方へ」*Là-bas vers l'église* (3)「俺ほどの伊達男がいようか」*Quel galant m'est comparable* (4)「乳香を摘む乙女たちの歌」*Chanson des cueilleuses de lentisque* (5)「何と陽気な」*Tout gai*.

[2]「トリパトス」*Tripatos*(カルヴォコレッシ訳, 1909).

[3]『七つの民謡』*Sept Chants populaires*(原語のまま1910)全7曲内訳→(1)「スペインの歌」*Chanson espagnole* (2)「フランスの歌」*Chansons françaises* (3)「イタリアの歌」*Chanson italienne* (4)「ヘブライの歌」*Chanson hébraïque* (5)「スコットランドの歌」*Chanson écossaise* (6)「フランドルの歌」*Chanson flamande* (7)「ロシアの歌」*Chanson russe*.

[4]『二つのヘブライの歌曲』*Deux Mélodies hébraïques*(原語のまま, 1914)全2曲内訳→(1)「頌栄の祈り(カディッシュ)」*Kaddish* (2)「永遠の謎」*L'Énigme éternelle*.

(8) 台本作家

・グラヴォレ：「花の外套」*Manteau de fleurs*(1903).

(9) 知られざる詩人たち

・ド・マレス R.de Marès：「恋の為に死んだ女王の譚歌」*Ballade de la reine morte d'aimer*(1894).

(10) 自作詩

[1]「おもちゃのクリスマス」*Le Noël des jouets*(1905)

[2]『三つの歌』*Trois Chansons*(合唱が原曲; 1916)→(1)「ニコレット」*Nicolette* (2)「天国の三羽の美しい鳥」*Trois Beaux Oiseaux du paradis* (3)「ロンド」*Ronde*.

ラヴェルはドビュッシーと同様に古い時代の詩人の作品に想を得て作曲しているが、ロマン派の詩には作曲していない。高踏派詩も若い時代にルコント・ド・リルの詩を作曲したに留まっている。専ら彼の同時代の詩、異国情緒に溢れる民謡からの歌曲に代表作がある。

以上、フォーレの歌曲を研究するにあたり、彼以前、同時代、後輩の作曲家の歌曲になった詩人を調べてきたが、これにより、フォーレは彼の人生と同時

進行の詩人の作品だけを扱っていることにおいて、他の作曲家と異なっていることが、判明されたと思う。すなわち、ロマン派はユゴーとゴーチエに限る。ボードレールのあとは、フォーレの青春時代に運動が盛んに行われていた高踏派詩において、歌曲の発展を試みて、歌曲の新しい方向を模索する。続いて、ヴェルレーヌやベルギーの詩人に言葉と音楽を生かした歌曲へと方向付けられる。そして、晩年に、サロンの閨秀詩人、第一次大戦で祖国のために早世した詩人を取り上げたのである。

それに比べて、先駆者たちは当然ロマン派詩、さらにオペラの台本作家との関わりが大きい。同時代の作曲家は、オペラの作曲家としての作品が多いマスネは当然台本作家、知られざる詩人の作品が多いが、ゴーチエ、ボードレール以降の詩に作曲している。

しかし、ドビュッシー、ラヴェルは、グノーやサン＝サーンスのように、中世以降の詩人へも視点を広げている、ということがわかる。

この調査結果を使ってさらに、フォーレと他の作曲家との異なる作曲態度について追求して行きたい。

注：

- (1) ニーデルマイエールの生涯と作品に関しては拙著『フォーレ ゆかりの地を訪ねて』p. 40-47、音楽之友社刊参照。
- (2) Saint-Saëns, *Vie d'un compositeur moderne*, Paris, 1893 in *Guide de la Mélodie et du Lied*, p. 476, 1994 Fayard.
- (3) 曲数に関して、筆者の調査が未了で、上記の *Guide de la Mélodie et du Lied* や *Marc Honegger* の音楽事典などの記述では、数字に違いが見られるからである。
- (4) 歌劇、舞台音楽、その他による歌曲の歌詞提供者など、調査した部分のみを記す。
- (5) フォーレの歌曲『シルヴィ』の詩人。
- (6) Arnaud Laster, *La Musique in La Gloire de Victor Hugo* p. 655-656。ラストールはほかに合唱曲：[1]「祖先の歌」*Chanson d'ancêtre*、[2]「おじいちゃんの歌」*Chanson du grand-père*、[3]「ヴィクトル・ユゴー賛歌」*Hymne à Vitor Hugo*、[4]「リラとハーブ」*La Lyre et La Harpe*、[5]「詩人の使命」*La Mission du poète*、および、[6]交響詩「オンファルの

糸車」*Le rouet d'Omphale* を加えている。

- (7) サン＝サーンスはユゴーの戯曲『城主たち』*Les Burgraves* の舞台付随音楽を1902年に作曲した。
- (8) カザリスについては Lawrence A. Joseph, *Henri Cazalis sa vie, son œuvre, son amitié avec Mallarmé*, p. 18 及び、*Bibliographie* p. 275参照。Editions Nizet, Paris, 1972。
 なお、サン＝サーンスとルニョに関しては拙著『フォーレ ゆかりの地』p. 76
- (9) 10曲は以下の通り。[1]「前奏曲」*Prélude* [2]「悲しい心」*Ame triste* [3]「しとやかさ」*Douceur* [4]「寂莫」*Silence* [5]「復活祭」*Pâques* [6]「雨の日」*Jour de pluie* [7]「恋の悩みにたえかねて」*Amoroso* [8]「五月」*Mai* [9]「小さな手」*Petite main* [10]「また思い出す(終曲)」*Reviens, Épiouque*。(曲名の和訳は「新訂標準音楽辞典」音楽之友社刊による)°
 この連作歌曲をサン＝サーンスは、『閉ざされた庭』を作曲中のフォーレに献呈している。
- (10) 連作歌曲『ペルシャの歌』*Op. 26*の内訳は以下の通り。[1]「そよ風」*La Brise* [2]「むなしい輝き」*La Splendeur vide* [3]「孤独な女」*La Solitaire* [4]「剣を手に」*Sabre à la main* [5]「墓場にて」*Au cimetière* [6]「渦巻」*Tournoiement*。(曲名の和訳は「新訂標準音楽辞典」音楽之友社刊による)。この曲集には語り、独唱、合唱、オーケストラによる4部からなる組曲 *Op. 26^{bis}* 『ペルシャの夜』*Nuit persane* が入っている。
- (11) デュパルク自身この曲を自選の12曲に入れなかった。しかし、出版社のサラベール Salabert は作曲者が破棄しなかったので、出版にあたり、最後の頁にこの曲を加えた。
- (12) 拙著『フォーレ ゆかりの地を訪ねて』(音楽之友社刊)p. 109-114にその成立過程が詳細に述べられている。
- (13) 新訂『標準音楽辞典』音楽之友社刊の遠山菜穂美氏執筆の「ショソン」(p. 894-895)参照。
- (14) 原作者、脚本作家の明記がないのは調査未了のため。
- (15) Georges Gourdet, *Debussy*, p. 95 Classiques Hachette de la musique.
- (16) プショールの詩による歌曲として新訂『標準音楽辞典』音楽之友社刊に?付きで記載されているが、ドビュッシーがこの詩人に出会うのは1888年のことである。しかし、プショールとショソンは親しく、ドビュッシーはロー

マへ行く前からショソソと出会っているので、ショソソを通してブショールを知ったのであろう。